俳　句　雑　誌

水　明

２０２１　３月号

令和三年三月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四巻第三号

《今月のかな女》

犬と馳ける家のまはりや木の芽晴

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

この句の二つ前に、「家人おぼえし仔犬の顔や壺すみれ」という句があるので、掲句は多分この仔犬との交わりのひと時かと思う。犬も若い内は元気溌剌で、特に仔犬であれば飼主のことなどお構いなしに、勝手気ままに動き回る。かな女が三十歳を少し過ぎた頃なので、なんとか犬の相手ができたのだろうが、さぞかしくたびれたことであろう。「木の芽晴」という早春の清々しい季節感とかな女の溌剌さが詠まれている俳句だと思う。

（鬼之介・註）

水　明

第1086号

―華の一句―

横書きの恋文届く雪の夜

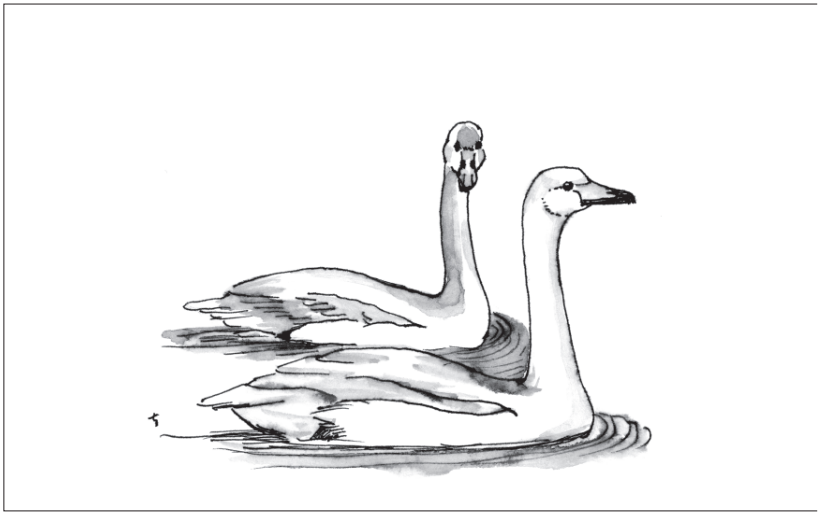
大村節代

毛筆専らの時代から明治維新を経て現代に至るまで、筆記用具は目覚ましく進歩し多様化した。当然のこと、横書きの手紙も普通になったが、掲句の横書きは日本語ではなく、外国語だと思う。それは英語か仏蘭西語か、もしかしたら亜剌比亜語かも。手紙を介しての人物像に興味津々の筆者である。　（鬼之介・推薦）

水明

令和３年
３月号

華の一句　1
夕景（作品）　山本鬼之介　4
甲羅酒（近詠）　大橋廸代　6
仕立て方の本（近詠）　星野和葉　7
冠木門　※主宰作品の鑑賞　境延昭　8
硯箱　※季音月評　井口俊晴　10
季音「雪」（同人作品）　鈴木康世　田寺玲子　永野史代　ほか　12
季音「月」（同人作品）　大場順子　内田恵子　藤澤喜久　ほか　18
季音「花」（同人作品）　正木萬蝶　井上玲子　松井由紀子　ほか　23
鼓笛集（同人作品）・私の一句　52
『水明誌』を繙く　原雅子　28



現代俳句鑑賞　網野月を　30

水明集　原田秀子　反町　修　曲淵徹雄　ほか　33

水明集作品評　山本鬼之介　46

水　琴　窟（水明集一月号鑑賞）　池田雅夫　50

俳誌望見　梅澤佐江　29

句集喝采　近藤徹平　32

全国大会兼題句募集　64

全国大会のご案内　65

水明例会報・各地句会報　56・59

春の吟行会のお知らせ　66

水明の記事掲載他誌より転載　55

風声・水明発展基金御礼　68・67

後記　70

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

夕景

山本鬼之介

歩調にも老いの一徹下萌えを

浅春や祇園甲部の夕景色

別誂への花簪にある余寒

春菊がブランド牛を連れてくる

板前の指のリズムよ桜魚

小鉢に水菜わりない仲になる夕べ

二の堰へ向かふ水音春の闇

一門の拍手そろふ建国日

甲羅酒

大橋廸代

鍬始まづは土竜を鷲掴み

ずわい蟹のタグに津居山吉野丸

しばらくは無言の行や甲羅酒

梅探る酸素ボンベを道連れに

白黒と名付け米屋のかじけ猫

蟬氷仮死のメダカを救ひけり

風花や籠さげインコ捜す美女

今年の元旦はオンライン御慶で始まった。東京、大阪、和歌山の家族九人、パソコンの画面で一時間を楽しく語り合った。長男の提案で全員参加のスマホラインも始めた。長男夫婦と長女はアップルウォッチに嵌り行動記録を競いあい、一日一万歩の目標に長女は通勤を徒歩に切り替えた。コロナ禍を機に家族の動向が手に取るようで、私も毎日の食事のおかずも手を抜かず、アッと驚かせる献立をと頭をひねる昨今である。

仕立て方の本

星野和葉

姿なき邪魔の入りぬ探梅行

切り株に人待ち顔や紅白梅

老木の洞に光陰白き梅

抜ける青空広がりてこそ梅真白

盆梅の莟の個々に史の流れ

枝振りは見やう見まねの剪定ぞ

盆梅の仕立て方本繰られずに

我が家の庭の隅に白梅の老木がある。樹齢と言ったら大げさだが、八十年位ではないかと思う。六十年前に家を建てた時すでに、それなりの大きさで先住していた。しばらくして、毎年梅酒を作る程の実が生った。が、ここ二十年は五、六個程しか取れない。もう一つ、頂いてから二十年程になる盆梅がある。当初は、紅白梅であったと記憶しているが、何時の間にか紅梅だけになってしまった。今年も寒さにめげず丸い可愛い莟をつけ、ぽつぽつ咲き始めた。いとおしい。

冠木門

◎主宰作品の鑑賞

境　延昭

十二月号

駅裏や「文化通り」の冬灯

昭和が一番輝いて見えた時代、一九六〇年からの七年間年率十パーセント程の経済成長が続いた。今もその再現の幻想から抜けきれぬ政治家が多い。改札も無かった駅の裏にどぶ板を跨いで入る赤提灯があった辺りが商店街になり、その先に四階建ての共同住宅が出来た。新興の代名詞が文化であった。文化住宅などと羨望を込めて呼んだ記憶がある。今や人も減りシャッターを下ろすところも多い。シャッター街となっても文化通りの名はそのまま残る。

上五の切れが鋭い。半世紀程の時代の変遷を冷たく突き放して詠む。花鳥諷詠を離れ、社会の事相こそが写生の対象である。

目明しの伝七の町枯柳

タイトル「黒門町」の元になった句。町の名から消え、今は小学校と郵便局にその名を残すのみである。日本初の喫茶店「可否茶館」が開店した町としても知られる。何より「伝七捕物帳」の舞台の町である。元々陣出達朗らの共同企画で京都新聞に連載されたもの。映画では高田浩吉、テレビでは中村梅之助・梅雀の親子がそれぞれ伝七を演じた。罪を憎んで人を憎まずの人柄と江戸下町の人情風情、誰もが共感するものである。とは言っても作品上の架空の存在、言わば虚の土俵で詠む作者独特の俳句作法である。

部屋占むる鉄道模型暮早し

「てつちゃん」と呼ばれる鉄道マニア、写真の仲間にもその一派が居た。時刻表の収集派、各地の路線を乗り歩く実車派そして鉄道模型に凝るものなど多岐多様。鉄道模型派でもレールゲージによって区分される。そのゲージの軌道を敷設して各種の模型を走らせる。二階二間をぶち抜きにして楽しんでいる。至福の時間、正に暮早しであろう。

実千両これぞ旧家の門構へ

千両は緑の茎と赤い実から草珊瑚の異名を持つ。冬のこの時期日本庭園には欠かせぬ存在である。赤とは限らず白や黄色の実もある。旧家の広い庭であれば黄色の「キミノセンリョウ」の様に思える。大宮の郊外では今も立派な長屋門を目にするが、旧家には数寄屋門が似合う。マイカーの車庫のた

めに門構えが貧相になってしまった。

一月号

マスクして吾が福耳のたしかなる

福耳は耳たぶの大きいことで、福相とされている。耳は聴覚の器官だが内耳が病むと平衡感覚を失う。顔の横に突き出る耳殻は本来は集音装置なのだが、無ければ眼鏡の蔓も掛けられない。マスクをして自分の福耳であることを確かめている。この一年ほどは年中マスクを手放せず、季語であることを失念しがちであった。

福相とされる福耳、金満家で艶福なのであろう。

鷹舞ふや武蔵野陵の高空を

正直、この句を鑑賞するには勇気が要る。高空を鷹が舞っている景。晴れやかさ、何かを鼓舞するような高揚感がある。鷹は昔から鷹狩りに使われた猛禽、しかも武蔵野陵は八王子に実在の昭和天皇墓陵である。安直な反戦句に与するものではないが、あの大戦時に陸海軍を統帥した大元帥であった天皇、決して称揚の対象にしてはならない。

焼藷買うてゆるりゆるりと九段坂

江戸時代に九層の石段を築きご用屋敷の長屋を作ったことが九段の名の由来である。九段から番町にかけては山の手と言われる閑静な住宅街、女学院をはじめ古くからの学園街でもある。靖国通りを下れば古書街の神保町に至る。六十年安保の時、スクラムを組んだ女子学生が呉れた握り飯を都電を背に雨の中で食った記憶がある。握り飯よりは焼藷が穏やかではるかに良い。女学院の校門前辺りに焼き芋屋が居たのか、それは又のどかで良い。

騒音にあらず文化ぞ除夜の鐘

除夜の鐘は仏教ではその年最後の除夜会の行事。仏教渡来早々に中国より伝えられたが、春節で祝う今の中国にその行事があるのは知らない。梵鐘の「梵」はサンスクリットで神聖・清浄の意、その響きには苦から逃れ悟りに至る功徳があるとされる。時計の針ではなく、百八つの鐘の最後の響きで新年を実感する。大晦日の習いであり文化である。余程の変人でもない限り雑音なんぞとは思わない。

身に余る初夢しかも膝枕

うらやましい限りである。初夢に限らず、輪郭を持った夢には滅多に出会わない。試験で答案用紙が白紙とか出張の便に乗り遅れたとか、後味の悪い気分が残ることが多い。夢に身分相応も不相応も無い筈だが、さぞや高貴な人の膝枕だったのか。あるいは膝枕は現実、膝枕のうちに見た初夢であったかもしれない。何れにせよ老いても男、作者の初夢に肖りたい。

硯箱

◆季音一月

井口俊晴

モンローの唇ほどや石榴笑む　　椎野美代子

私達の世代でマリリン・モンローを知らぬ人はいないだろう。金髪美女、セックスシンボル…。ハリウッド映画の黄金時代を生き、三十六歳で謎の死を遂げた。大胆なドレスを着て、ウエーブのかかった金髪に真っ赤な唇、男を誘惑するような半ば開けた彼女の唇は、熟しきってはじけた石榴の実のようでもある。哀しく恐ろしい鬼子母神にまつわる連想ゆえか、何かと謎めいた深紅の果実は、気の弱い男どもをあざ笑っているかのようだ。

やつちや場の午後はがらんと冬近し　　石山かつ子

やっちゃ場（青物市場）の朝は早い。全国から前夜のうちに運び込まれた野菜や果物は、見やすいように並べられる。それが朝の五時ごろ。買い手の品定めが終った六時半にはセリが始まって、八時ごろには荷物の運び出しとなる。だから、みんなの昼食がすんだころの市場は、戦場のようだった喧騒が消え、静寂そのもの。がらんとして人気がないだけに寒さが身に沁み、冬が近いことが感じられる。

尻向けて牛曳かれ行く時雨雲　　森田祥絵

雨雲が垂れこめ、晩秋の村々は冬支度に忙しい。薄暗い空からは時折り雨粒が落ちて来る。その時、村外れに向かう細い道を、一頭の茶色い毛をした牛が曳かれて行く。とぼとぼと歩く後ろ姿は何だか悲しげである。大きなお尻をこちらに向けて、時折り尻尾を振ってあたりを見るような仕種も。牛はどこへ行くのだろうか。一日の終わりに向かってか、あるいはその生涯の終わりに向かってか。優しい牛のためにも、幸多かれと念じないではいられない。

山城の天主の跡や鷹渡る　　松宮保人

姫路城のように大きく優雅な城のファンは多いが、最近は「雲海に浮かぶ天空の山城」がブームだそうだ。中でも岡山県高梁市北部にある備中松山城は、高さ十一メートルの天守閣が唯

一残っており、私も一度は行きたいと思っている。では、作品の山城はどこのものだろうか。跡だけしか残っていない天守閣を訪ね、作者は遥か上空を飛び去る鷹の姿を見つけた。歴史の荒波に押し流され、礎石のみとなった山城と雄々しい鷹、孤高の者同士が奏でるシンフォニーだ。

おんぶばったこんなところに初時雨　　岡野順子

小学校に通う孫娘がオンブバッタを捕まえて来た。近所に畑はなく、草むらにいたのだそうだ。色は緑色ではなく、枯葉色だった。下校の途中であるから、そろそろ薄暗くなっていて、少しばかり寒い。可哀そうな気がしたので、家にあったプラスチック製の虫かごに入れてやった。バッタ夫婦は虫かごホテルで二泊三日を過ごし、見沼たんぼの草むらに帰って行った。作者が見つけたオンブバッタはどうだったろう。初時雨に濡れて寂しそうだったろうか。「おや、こんなところに」という、小さな驚きが伝わってくる。

吊し柿雨戸に影の一列に　　野平美紗子

「柿が赤くなると医者が青くなる」という諺があるが、いかに美味しい柿でも、渋柿では食べるわけにいかない。散歩していると、皮をむいた柿五、六個を縄に括って軒先にぶら下げた家をよく見かける。ま、それだけ渋柿が多いと言えばそれだけのことだが、日本の原風景を見るようで、私は好きである。まだ閉まったままの雨戸に朝日が当たって、吊るした柿の作る影が一列に並んでいる。

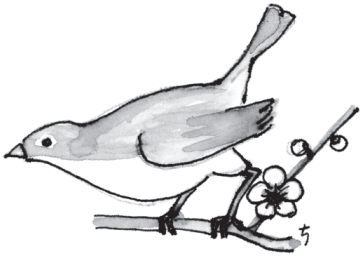
朝刊の少し湿りて今朝の冬　　松山清子

寒くなって布団からなかなか出られない。なんとか起きだして、郵便受けの新聞を取る。最近は大企業の提携・合併とか、華々しいニュースには、とんとお目にかからなくなってしまった。分厚い朝刊はそれなりに持ち重りがして、気のせいだろうか、ちょっと湿っぽい気がする。ああ、そうだった、きょうは立冬だった。これから毎日もっと寒くなって、朝も薄暗いのだろうな。

然りげ無く病院食に衣被　　宮崎雅訓

みんなから「鉄人」と言われ、病気知らずだったはずの私が、なんと入院するはめに。幸い重症とまではいかず、一週間ほどで退院できる見通しだ。そうなると、病室でゴロゴロしているのは退屈の限り。なにせテレビ番組はつまらないし、家から持ち込んだ本は、読むとすぐ疲れてしまう。気分転換と言えば三度の食事だが、美味しくなく、食べても力が出ない。そんな時、おかずに衣被が出た。ちょっと意外な感じで悪くない。賄さん、なかなか気が利くじゃないか。

季音雪



初春

鈴木康世

初日さす燭の揺らめく仏間かな
悠悠と無蓋の空を初鴉
稜線の彼方の富士を初景色
自然治癒力信じ今年の大福茶
老いの身の老いを楽しむ老の春

年新た

田寺玲子

ゆく年の声なき声に耳すます
竪琴の指のはなやぎ年新た
海峡に鳶の輪二つ寒入日
獣道かける少年息白し
星冴ゆるジャズ流れ来る北野坂

真うしろ　永野史代

電飾を避けて喪中のクリスマス
人影まばら令和二年のクリスマス
母と娘の乳房ゆらゆら冬至の湯
人恋へば触れもせで散る寒椿
わたくしの真うしろにゐる雪女郎

初明り　西山貴美子

東塔の三手先仰ぐ初明り
初明り露座仏の肩まろまろと
水ぐすりとろりと舌に松の内
二日はや嘴太鴉に喝くらふ
老涙を拭ひつつ年迎へけり

水仙花　波多野寿子

飛び石を渡れば楚々と水仙花
数の子をぽろりと噛んで今を生き
コロナでも心待ちする初座敷
曾孫等来ず年玉袋持つては置く
箸紙に書く名ほのかに墨匂ふ

ら抜き言葉　星野和葉

大らかにら抜き言葉を春着の子
四日はやバター香りぬ白卓布
百度石の黙に触れたり寒九かな
管楽器背に寒林を行く青年
寒林を仰ぎし先に星の綺羅

寒林　茂木和子

手を打てば寒林の気に罅走る
寒林の一樹は父のまぼろしか
檣頭を離れぬ一羽冬かもめ
冬かもめ近づき過ぎず遠すぎず
冬かもめ嘴に紅差す親しさよ

冬の海　矢作水尾

初夢を言ひ惜しむ間に忘れけり
冬かもめ大漁船を攻めたつる
漁火の失せゆく沖や冬の海
寒林に子猫の爪のごとき月
苔深き盆景の庭淑気かな

小正月　山中みどり

寒晴れや取消しばかり予定表
丹念に読む朝刊紙小正月
焼き立てパンの列に紛るる小正月
船宿や鯨尾の身の薄造り
柔軟剤の匂ひのパジャマ冬深む

春近し　由良ゆら女

山頂を穴のあくほど待つ初日
ゆつたりと墨に磨らるる二日かな
円相を肚で一筆福寿草
寒紅の口一勢にオラトリオ
埋けおきし野菜に目鼻春近し

春恋ひ　吉住光弥

大川に櫓太鼓音撥ね寒の晴
埴輪娘の胸乳は天を寒の晴
信ずるは無量のいのち薺粥
残り葉は盾臘梅の古武士めく
春恋のおもひ逸れし鳥にさえ

領収書　網野月を

隠れ家や誰が為に咲く福寿草
寒の内妻には見せぬ領収書
前世は鯨次に生るとき大鯨
空模様子のことなども鯨話す
待春を刑事ドラマの再放送

クリスマス　石井喜恵

段取りはすべて承知やサンタクロース
幾つに切ろうこのクリスマスケーキ
ウインドーに硝子の靴やクリスマス
天使に羽魔女に箒や聖夜劇
音絶えて眠りの浅き聖樹かな

横断旗　石山かつ子

大楷のはたと崩るる淑気かな
初鴉背を正し詠む素十句集
根来寺の焼討の跡寒月光
雪だるま横断旗を持たされて
鳶職は根生ひの江戸つ子出初式

御　慶

大橋廸代

一族の御慶はみだすオンライン
ごつごつの指香らせて摘む若菜
土居よぎる鼬一瞬金色に
絵筆いま寒九の色に鯱を
一塊の脂身おごる寒禽に

雪こんこ

大村節代

電線から音の旋律雪降れり
雪が降る手押車に母を乗せ
雪しんしん影の重なる一本道
横書きの恋文届く雪の夜
雪こんこ一人の家に古時計

ルバイヤート

栢尾さく子

白鳥を身近に弾む吟行会
色褪せし異教徒の絵や冬座敷
豊後梅綻び父母の恋しき日
ルバイヤート読んで寒さの募る夜
置薬吊る寒き夜の母の部屋

一　月

菊池ひろこ

炉明かりや音となりゆく雪野原
引き窓の光朝なり寒卵
寒卵飾りにつかふ網代籠
赤紐で括りし丑の年賀状
ぬるま湯に泛かせ真昼の屠蘇盃

冬舞台　五明昇

京しぐれ相傘たたむ寺廂
機音に山茶花の散る城下町
佐渡遥か出船に縋る冬鷗
冬椿ここは紀文の屋敷跡
見得を切る諸肌脱ぎの大枯木

羽織紐　境延昭

平打の淑気をむすぶ羽織紐
初夢にまぶせし嘘が三分ほど
粗彫りの芋版でんと年賀状
裸婦像はコンテの素描暖炉燃ゆ
冬晴のビストロに立つ三色旗

異なる世　椎野美代子

体内に潮騒立ちぬ七日粥
しやぶしやぶの鰤の切身に潮の渦
薬喰夫と異なる世に住みて
夫恋の果ての化身ぞ雪女
雪女せつぱつまりし齢もて

新年　島津初花

若き日も今も眩しき白セーター
寒鰤に一心込めて引く包丁
伊勢海老や海の威厳を損なはず
居間からのお笑ひ漏るる初湯かな
巣箱掛け待つ楽しみも初仕事

季音月

若菜粥　大場順子

「焼藷日和」の幟を立てて焼藷屋
日陰ればおのが光の冬桜
邂逅や身に降るごとき冬の星
若菜粥噴けば萌黄をこぼしけり
七草の粥に齢の青みゆく

冬晴　内田恵子

冬晴の空にほつこり吸ひ込まれ
ふるさとは遠く近くに七日粥
従順なふりして上目冬日向
馬小屋に拡ぐる寝藁冬日和
冬薔薇魔女の繰る糸車

初句会　藤澤喜久

初富士の雄姿を天に相模湾
備長炭あかあかと燃え福沸し
初句会古き絵羽織一つ紋
初夢の短編走る走る私
一嵩となりし米寿の初寝覚

初電話　原田想子

健やかな声のとび込む初電話
餅二つ焼いて昼餉や妻の留守
どんぶりに二度たたき割る寒卵
まだ見たき夢除雪車に打ち切られ
つとマスクとり主治医の眼となりぬ

寒の水　宇田白鷺

床の間は日輪の軸事始め
牛の角なでて神社の初御空
伊勢海老や鋏にタグは要らぬなり
谷川に横たはる木や寒の水
冴え返る薄ら着物の竹人形

初暦　松宮保人

瑞鳥の飛び来る郷や初御空
ふる里は山より明けし初暦
近況を密に書きくる年賀状
効能を頼りて服す寒の水
青竹の柄杓飲み干す寒の水

冬桜　高島寛治

冬うらら五百羅漢は猫背なり
寒晴や分水嶺に手を翳す
厚着して朝市仕切る紅一点
塩を振る程よき高み焼鳥屋
近づけば産湯のにほひ冬桜

寒　十倉和子

初鴉奥山の雪告げに来る
瑞兆か雪かむる樹へ鶴
足跡がはしやいでゐたり初雪に
寒鵙の鋭声が刺さるぼんのくぼ
寒を生く寒鯉のごと息ひそめ

早春の若狭　鳥羽和風

立春の白波に浮く沖の石
薄氷に標本の如鯉正す
春寒や鯉仰天のたたき網
禅僧の草鞋一列春の雪
ものの芽の鵜の瀬の杜や水明り

白衣観音　柚木治子

楷書めく神技に喝采梯子乗り
下を向く白衣観音冬桜
冬桜刀自が奏づる平家琵琶
行き止まる鉄路の跡や冬桜
永年の居酒屋消ゆる枯木星

女正月　森田祥絵

伝書鳩また立ち上がる恵方かな
あの店の出前を奢る女正月
初ライブ舞妓に昼の付け睫毛
末枯の芝広々と勅使門
鯉が跳ね寒夜の池が深呼吸

寒に入る

森本早苗

寒に入るビビューンと唸る二重跳び
お誘ひの一行の有り寒見舞
寒空へ団扇太鼓の轟きぬ
寒の餅祖母踏襲の手際かな
大寒やもふもふ猫の甘つたれ

冬帽子

森川義子

イニシャルを入れて素敵な冬帽子
凍滝を上る漢の命綱
年重ね我がかんばせを初鏡
下校児の虜となりし雪達磨
ふて寝するあどけなき顔掘炬燵

瑞兆

小倉倭子

淑気満つ土手の小さな青い花
淑気満つ神官の掃く竹箒
一本締め心肝伝はる淑気かな
逞しや荒地の気根淑気満つ
健気なる武芸の素質寒げいこ

松

山田美佐尾

庭統ぶる五葉の松の極立てり
岩に立つ松は男の艶すがた
山城の崩れんばかりどんどの火
淑気満つ森は靖国招魂社
冬深む路上ライブの人まばら

年新た

井関礼子

代り映え無きを良しとし年新た
初明り世事の平穏祈るのみ
三親等集へぬ世情お元日
三ヶ日おせち囲むも老二人
恙なき卒寿の春を謝しもして

春着

丸山マスミ

姿見に明日の春着の色流る
ぽつくりの鈴ちりちりん春着の子
冬晴や色を転がす金平糖
焼き鳥の串数競ふ飲み仲間
上弦の月きりきりと寒に入る

立春の空　池田雅夫

立春の空のあでやか日の出まへ
老梅の曲がり具合に適ふ風
無防備な背中余寒の一波二波
韋駄天に優る脚力春しぐれ
唐突に本性さらし雪解川

鳥羽谷俳句　霜中冬至

鯨尺のものさしもあり針供養
こんにやくも豆腐も主役針納め
うすらひや戦後のあそび連れてくる
はなむけに寒の戻りのきびしかり
初午や鳥羽谷俳句の盛衰記

昼の月　川崎道子

裸木の投網にかかる昼の月
厨ごみ捨てに戸を開け冬銀河
天井の染みは妖怪風邪籠り
冬木立抜けて考へ定まれり
大寒の雲突きあぐる避雷針

初詣　加藤むら子

まづ地元早朝ひとり初詣
拝礼を済ませ遠方雪の山
新春に高鳴る電話よき知らせ
難漢字入れたき一句掘炬燵
東西に雲の一列年新た

花浄土　荒井倶子

電飾の駅前抜けて冬銀河
寒椿寺に茶釜の由緒書
冬椿真つ赤な帽子の六地蔵
冬椿落ちて一面花浄土
弥撒の鐘風花の舞ふトラピスト

睦月　渡辺舎人

一月の坂プロペラ機となりゆく児
七種や二杯目にたす香の柚子
二拍吸ひ二拍息白陸上部
寒暁のラジオ佛として生きる
潤みたる女声尊し小正月

聖夜劇　町野広子

冬木立足早に抜け医学生
白布一枚纏ひてにはか聖夜劇
一人者同志のリモート聖誕祭
金婚も過ぎて至福の冬至風呂
近所から友から届く冬至柚子

淑気満つ　井上燈女

コロナ禍や初占ひ師に手をあづけ
捨てし句を拾ひ直して淑気満つ
ひとり居のわづかで足りる七種粥
捨て玩具とり巻き遊ぶか犬ふぐり
上ン家も中ン家もあり葱を掘る

夫の忌　伊藤敦子

夫の忌の冬雲動くこともなし
亡夫の手が肩にあるかに大旦
冬すみれピカソの彩を零しけり
マフラーに顎を埋めて流星群
起き抜けに寒九の水を先づ一杯

☆

☆

初句会　岡野順子

初句会何より気負ひ出席す
友それぞれ初句会なる意気込みよ
初句会何はともあれ出席す
初句会上気せし友我もまた
お菓子あまた友もいろいろ初句会

季音花

ピザ尽し　正木萬蝶

冬薔薇や昨日まで造花だつたのに
旧姓に戻りしきみと初句会
句友ほぼふつくらとして初句会
ピザハット・ドミノ・ピザーラ女正月
母子手帳受け取る朝の寒卵

冬晴　井上玲子

晴れやかに鶴の舞ふ帯春小袖
若冲の鶏鳴を聞く初枕
行平の恵みゆたかな若菜粥
冬晴や指呼に立つ富士父性めく
噴煙は太古の息吹冬晴るる

塩加減　松井由紀子

鳥の来て薄陽に遊ぶ枯木立
路地裏に昭和の匂青木の実
晩節のよき塩加減七日粥
大寒の裾を揺らして終電車
大寒が正座してゐる奥座敷

冬来りなば　井口俊晴

耳当てて幹の鼓動を冬木立
寒林をほのと照らして月上る
クリスマス良い子にしてたはずだけど
あーでもないこーでもないと初寝覚
冬鷗胸ふくらませ誰を待つ

正月　下川光子

疫病を鎮めんと撞く除夜の鐘
「カノン」鳴る家族無料の初電話
椀に餅加へて母の七日粥
手捻りの碗の重たき七日粥
臘梅の山懐に香の満つる

嫁が君　近藤徹平

浅間背に白衣観音冬日和
急行の停まらぬホーム日向ぼこ
無住寺の主は屋根裏嫁が君
分校や今朝は師弟が雪達磨
寒村は過客歓迎寒椿

誕生日　河野はるみ

初詣寿老人より始まりぬ
金盃の屠蘇にほろ酔ひ放歌せり
うつつでは実らぬ恋よ初夢に
東雲に金星残りはや四日
誕生日に二つは多い寒卵

春隣　大塚茂子

くねりくねりと大樹に絡み蔦枯るる
枯るる蔦見上ぐる先に昼の月
春隣吹子の火花青光
空気割れシャーペン折るる寒の入
入院と夫待つた無し寒の朝

夢はじめ　梅澤佐江

やんごとなき君の通ひ路夢はじめ
たらちねの遺愛の春着香も纏ひ
閑閑と国見したるや初鴉
淑気いま産声匂ひくるロビー
白粥に落とす無双の寒卵

寒四郎　上戸千津子

一張羅の帽子飛ばすや寒四郎
古民家の土間広々と冬深し
寒木瓜の唯一輪に声集ふ
しずり雪狭庭の響き夜を濃くす
女正月彼や是やと桜粥

初茜　宮﨑チアキ

たくましき命の証青木の実
たしかなる目覚め促す初茜
村興す青空市の福寿草
輪飾やわが家に神の多多在す
冬芽観る心の窓を全開に

飲み薬　田中章嘉

初春や十七弦の春の海
初茜居残る星を従へて
鏡餅の中は切り餅四五枚か
初寄席や人情物で取りをとる
初日差す机上に並ぶ飲み薬

振舞酒　野口和子

初暦縁起物描く鶴太郎
梅早し古木ゆるりと目覚めけり
金平牛蒡人参多め節料理
揺らぐごと太鼓道場初稽古
菩提寺の振舞酒や除夜の鐘

雪　飛永鼓

初雪や大地無音を取り戻す
遮断機の音幽かなり雪しんしん
無になりて雪の落下を見届ける
残雪や古代の土器を眠らせて
残雪の塊にある未練かな

賀状　熊倉千重子

慈母のよな陽射し賜はり初弁天
賀状に座す達磨の気迫赤極む
初御空力（ちから）の襷ゴールへと
蝦夷風にいくらを乗せて雑煮食ぶ
初電話術後の友の声に張り

冬牡丹　野平美紗子

六つ咲き蕚はみ出づる寒牡丹
木洩れ陽や絹の艶めき冬牡丹
散歩時歩を止め見入る寒落輝
大寒や安否気遣ふ子の電話
大寒や松毬並ぶ受信箱

初みくじ　石田慶子

病む夫の喉ゆるゆると寒卵
寒卵パックご飯に添へてだし
重箱を戸棚の奥に小正月
着ぶくれて紐の結べぬスニーカー
浅草寺凶を五回の初みくじ

楪　松山清子

楪や寺継ぐ甥のまだ若し
つくづくと傘寿の顔を初鏡
撫牛のてらてら光る冬日和
大寒の手足を伸ばす仕舞風呂
水仙や目の前鳶の滑空す

白寿　福田千春

豆煮るを譲らぬ白寿寒卵
年毎に声母に似て日向ぼこ
ハーレーの漢こだはる革ジャンパー
自画像をほつそりと描く小正月
生まれくる赤子幸あれ実千両

冬　宮崎紫水

冬の山ゆつたり何も語らずに
晴天を背にどつしりと冬の雲
冬夕焼街はほのかに化粧して
広がりし岸辺をひつそり冬の川
冬木立自転車真つ直ぐ帰路につく

御代の春　菅原知子

冬の富士時にやさしく飽くまで厳し
稽古場に通ふ少年寒卵
乗り初めのコロナ対策客疎ら
初風呂の右足よりはいつもの慣ひ
女正月来し方語る老姉妹

お年玉　中野彊

届きたるおせちを開ける笑顔かな
年賀状年毎に減る淋しさよ
お年玉渡し続けて半世紀
湯たんぽに優しき地球感じをり
すぐ定まる日は気持よし冬帽子

小正月　後藤綾子

初夢も千々に乱れて定まらず
散歩する犬は春着でしゆくしゆくと
四世代女系家族の小正月
太平洋を越えて御慶のメール来る
富士霊峰の真上を通る初飛行

冬桜　西浦千枝子

新築の寺より響く除夜の鐘
真白な新車に弾む初仕事
長距離のドライバー癒す冬桜
白波立つ南紀の海や寒に入る
初春や登りつめたる八十路坂

☆

☆

俳句
3月号予告
2月25日発売
予価（本体864円＋税）

特別作品　高野ムツオ・齋藤愼爾・鈴木貞雄

追悼　有馬朗人
人と作品／追悼エッセイ／作品論／全句集解説／有馬朗人とHAIKU／交際・教えの思い出／アルバム・年譜

実用特集　新しい句を詠む
▼新しさとは何か　▼私が考える新しさ

句集特集　宮坂静生『草魂』

鑑賞　日本の俳人100　小倉英男『あるがまま』

第9回　星野立子賞発表！　受賞作30句抄ほか

第15回　角川全国俳句大賞発表

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

『水明誌』を繙く（水明一月号）

原　雅子（「梟」同人・「窓」代表）

磨き丸太を濡らす北山初しぐれ（二三三頁）　鈴木康世

北山は京都市北部、良質の杉材を産出する地域――といってしまうと社会科授業のようで情緒のないことはなはだしいけれど、「北山しぐれ」の語から大抵の人が思い浮かべるのは、神社仏閣や行事の晴れやかさとはまた別の鄙びた京都の風情である。その印象をもたらしたのは川端康成の小説『古都』。北山杉の村と中京の商家とに別れ別れに育った双子の姉妹の物語だった。

掲出句は北山杉の山林を背景に、この地域独特の考案である磨き丸太を産する林業の生活を想像させてくれる。整然と並び立つ杉の植林に見惚れるのは観光の視点だが、その育成には一年を通じて手厚い世話が欠かせないらしい。伐採後に樹皮を剥ぎ、さらに磨くという手間をかけて、古い時代から京の都の数寄屋建築に趣を添えてきた。現在ではほぼ機械化されたようだが、以前は砂で丸太を磨くのは主に女性たちの仕事だった。どちらにしても、艶やかな木肌を見せる用材がずらりと並べられた状景は壮観だろう。そこへ降りかかる時雨は冬の到来を告げる。人の営みと自然現象との交差。

この句にそこはかとない華やぎを覚えるのは、古来詠みつがれてきた詩語としての時雨のイメージが背後にあることが大きい。さらには「初・しぐれ」であることで、季節に先駆ける心の弾みが加わって、一句の世界は風土・風物への讃歌となっている。

秋うらら真鯉水面の雲を吸ふ（四二頁）　青木鶴城

よく晴れてのどかな秋日和。正午を少し過ぎたくらいだろうか。やわらかな日差しが水面に広がっている。この季節、空気は澄み渡って池の水は静かに空を映し雲を映す。そんなとき、ふと水底に影が動いたと見る間に浮かび上がったのは鯉の口だった。

花片や紅葉を呑み込む句は沢山見るけれど「雲」を吸い込んだというのは初めてである。水面に映る雲は虚像そのもの。鯉は悪食だそうだが、ここではまるで仙人（仙鯉というべきか）のように虚を食べている。それでいながらこの句が実体感を失っていないのは、仰向いて口をパクパクさせる鯉の習性を押さえているからだろう。さらには、機知に傾きそうな下五を包み込む〈秋うらら〉の季語の効果も大きかったのではないか。一般的にいって〈秋うらら〉とか〈秋澄む〉の季語は秋晴れの空気の感触を伝えるが、秋そのものの状態を示す言葉としてはかなり気分的であるのは否めない。その辺りのことを飯田龍太は「季語のなかには、言葉の粉飾が表面に見え過ぎるために、かえって佳句を生み難いものがある」といっていた。用いるのに危険な季語かもしれない。掲出句はいわば毒を以て毒を制したというべきか。

もう一つ感心したことがある。作者は鯉を「真鯉」と限定した。確かに色鯉の類いであったら色彩が邪魔をして、全体の印象が散漫になってしまう。周到な選択だった。

俳誌望見

梅澤佐江

『馬酔木』　令和二年一一月号　通巻一一六一号
主宰　徳田千鶴子　発行所　東京都杉並区

大正一一年四月、水原秋桜子が東京で創刊。師系水原秋桜子。「抒情と調べを大切に明澄な詩魂をめざす」を理念とする。（月刊）

主宰詠「見つめて」七句より

鶴首の白磁の艶や沢桔梗
会へずとも通ふ心や西鶴忌

前句、鶴首の一輪挿しに野にあるように挿された沢桔梗、簡素な白磁の光沢の中から真っ直ぐに伸びた花穂に群れ飛ぶような青紫の花、その静寂な佇まいの中で自身と対峙する作者が居る。後句、「西鶴忌」の季語の斡旋により、俳諧師、浮世草子作家でもあった西鶴と繋る。好色物とは別に義理堅い武士気質を描いた武家物もあり、「会へずとも通ふ心」に今は亡き祖父秋桜子、父春郎の俳句精神を継承した後も常に真摯に心の対話をして来られた現主宰の崇高な精神をみた。

指先に気づかぬ傷や火の恋し
秋の風心にもある裏表

前句、朝晩冷え冷えとし始め、知らぬ間に指先に出来た傷を焦点として心許無さ、侘しさに赤い火の温もりを想像する心理的なバランス俳句の味わい。後句、爽やかに花野をわたる風から、日々冷気を加え身に沁みてそこはかと無く哀れをそそる色なき風まで、秋風はそれなりに情趣があるが、季節の移ろいと共に人の心の移ろいともなると物悲しさと虚しさを感じる。せめての事、軸足はぶれずに生きたいものである。

待宵や夢はどこまで夢のまま

名月を明日に控えた宵、更に訪れる人を待つような感慨にふけっている。今秋一〇〇周年を迎えられる結社「馬酔木」、秋桜子、春郎から引き継ぎ堅実に守って来られた一〇年の思いを糧に、栄えある一〇〇年とするべく夢の実現の日を待つ覚悟が「夢はどこまで」に強く滲み出ていて心からの共感を覚える。

十一月集　自選　七八名　各五句より　三名

筑波嶺のふところ広き早稲の波　岡田貞峰
鈴鴨の声のうながす夜明けなり　黒坂紫陽子
蜩のトレモロひびく慰霊塔　渡邊千枝子

風雪集　主宰選　六三名　各五句より　三名

皀角子の実のからからと異郷なり　河野亘子
歌垣の山へ三里や草雲雀　斉藤玲子
川舟の棹の触れたるこぼれ萩　曽根薫風

馬酔木集　主宰選　五八五名　四句より　五名

艶のある羽根を拾ひし秋暑かな　有宗眞弓
蕎麦の花黎明の風立つところ　天田牽牛子
誰も来ぬ日の暮れゆくよ金魚玉　杉田智榮子
初嵐妣の好みしよろけ縞　喜々津たゑ
身に入むや母の当てたる力布　利國春美

あしかび抄・ジュニアの部で小二から中一の方々のお句に、同人（兼久ちわき氏）による丁寧な鑑賞と励ましを拝読し、結社の伝統と裾野の広さを痛感した。

現代俳句鑑賞

網野月を

まづ開く新日記にある世界地図　有馬朗人

（『俳壇』1月号・初春より）

「新日記」とあるが、予定を書き込むダイアリーのように思われる。末にある付録に世界地図が載っていたりするからだ。最近はこの世界地図が毎年のように変わっている。国名も境界線もである。その有様を確認して現代人としての立ち位置を再確認しておられたのであろうか？作者は去年の暮れに鬼籍に入られました。白鳥の歌になったものの一句である。

謎解きの件に入る炬燵かな　宮本佳世乃

（『俳壇』1月号・謎解きのより）

何の謎解きなのか？「炬燵」での話題に即したものなのかも知れないし、視ているテレビの二時間ドラマの再放送の仕舞の十五分間かも知れない。「入る」は「件に」を受けても繋がるし、「炬燵」にも繋がっている。他に「冬の日の当たる瀬戸物の蛙」がある。

空青く冬草青く先生忌　池田澄子

（『俳句』1月号・夕さればより）

作者の先生とは三橋敏雄氏のことであろうから、昨年暮れには二十回忌であった。氏の周囲の方々は「長濤忌」という季語を創案されたようであったが、作者は「先生忌」と言い切っている。作者にとっては紛れもない「先生忌」なのである。そして空も冬草も青いのである。他に「夕されば灯して家や隅に葱」がある。

無名なる大往生者除夜の鐘　黒田杏子

（『俳句』1月号・カマラ・ハリスの立姿より）

歴史はかつて「無名なる大往生者」を限りなく出してきた。日本の百年を振り返れば、第二次世界大戦、阪神淡路大震災、東日本大震災、そしてコロナ感染症などは四桁以上に及ぶ「大往生者」である。昭和四十年代の交通戦争や、昨今の自殺者も同様であろう。政治はその反省もなく対応策もなく事態を看過している。庶民には除夜の鐘をききながら数多の魂を痛むことしかできないのであろうか。社会への警鐘を鳴らし続ける作者ならではの作句である。他に「賀状千通写真家と俳人に」がある。

水槽の鯛のあぎとう年の暮　中村和弘

（『俳句四季』1月号・巻頭句より）

「あぎとう」とは喰喝（げんぎょう）することである。生簀料理の和食店か、それとも水族館であろうか。空間的な情報は、鯛が入れられている水槽という広さだけなのである。水槽といういわば人工的な設備の中にいる鯛に焦点を当てているのである。作者は「あぎとう」までに水槽で飼育されている鯛へ心寄せていることになる。座五の季語「年の暮」だからこそ、そこのところが作者を惹きつけたのであろう。

ほんたうの空をさがしに凧のぼる　笠原千佳

（『俳句四季』1月号・軒氷柱より）

上五の「ほんたう」はなかなか使いこなせない措辞であろう。「凧」にして些か「ほんたう」の使用しずらさが緩和されているように感じる。そこで「凧」であるが、古くは春の季語として分類している歳時記が多いようである。が昨今は正月の遊びとしても認められていて「初凧」「飾り凧」として分けて使用する向きもある。掲句はむろん正月の時期の季感で詠んでいると考えられる。他に「太陽の泪を溜めし軒氷柱」がある。

マフラーの長きが散らす宇宙塵　佐怒賀正美

（『俳句界』1月号・自選30句より）

動詞の主体を「マフラー」にしているのであるが、「マフラー」をしている人物、もしくは作者自身が「散ら」していると読めるであろう。作者もまた宇宙の中の一員なのである。座五の「宇宙塵」と大きく捉えながら、その捉え方は作者の構成の大きさに匹敵しているのである。他に「アフリカの顎骨あたり飛ぶ二月」がある。

楽廊のオルガニストの息白し　酒井湧水

（『俳句界』1月号・祈りより）

教会の正面入り口の内部側の上部、二階の位置にパイプオルガンが設置されているのが教会の定型的な作りになっていることが多いようである。とすると作者の視線が気になるところで、二階の側廊にある席から斜めに覗いたのかも知れない。暖房の効く教会も多くなったが、早朝のミサなどは「息白し」ということになるのであろう。

抱く便器冷たし短夜の悪阻
すみれそよぐ生後0日目の寝息
左手は涙拭う手冬の星　神野紗希

（句集『すみれそよぐ』より）

この句集は作者の母親になる前からの子育ての記録と重なっている。温かみのある句とシリアスな内容の句とが織り込まれている。彫りの深い描写の句と柔らかさの充溢している肌触りの句が散りばめられている。作者の心持が直截に句の様態に結晶している。

句集喝采

近藤徹平

◆北島大果「無垢」

角川書店

著者略歴　昭和十五年東京都新橋生。同四十一年「萬緑」入会、中村草田男に師事、平成二十九年「萬緑」終刊後「森の座」創刊に参加。句集『少年』『閃々』『大川』『不二』刊。

著者が二十代より師事した草田男は戦後の俳句の潮流の一派を主導した俳人。

草田男を嚙み読む病床冬深し
鮮しきことを興さん新松子
萬緑や少年の瞳に探求心
草田男の不老不死の詩寒の海

「あとがき」によれば平成二十六年から体調を崩し入院した際に先師の句の勉強に励んだが、体力不足は否めぬ由。第二句は萬緑終刊後の、第三句は萬緑入会時の著者の心意気であろう。第四句、草田男句は著者にとって聖典なのである。

角落ちし鹿の眼に遇ふ無垢に遇ふ
知恵を吸ふ赤児の黒瞳初燕
墨東へ天を移しぬ鰯雲
枯草を握ればぬくし八十路来る

第一句は句集の標題句、帯によれば「宮島の山道で出遇った鹿と眼が合って、無垢を突き付けられた」と悟った由。第二句は元来無垢の赤児を詠んだ句。第三句は生涯の故郷東京を詠んだ句。第四句は八十路を迎え俳句へなお尽きぬ熱情。

◆高橋健文「中今」

東京四季出版

著者略歴　昭和二十六年宮城県塩竈市生。平成五年「好日」入会、小出秋光・長峰竹芳に師事、令和元年「好日」主宰継承。句集『白墨』『水の器』刊。

「あとがき」に「過去の積み重ねがあって現在があり、現在の積み重ねの先に未来がある。俳句を作ることで、その時の現在の自分を確認しつつ歩んで行きたい」と信条を記す。

而して至る中今桐の花
たまゆらをつなぎあはせて初御空
かひやぐら死者も聖者も船に乗り
八月の雲かがやきて死者のこゑ

第一句は句集の標題句。第二句、現在の一瞬が大切と再認識。第三句、著者の現在は先人達との交流の積み重ねと回顧した句。第四句、八月は原爆忌、終戦の日等の特別な月。

定年や金魚のゐない金魚鉢
風評といふもの胡瓜曲がりけり
われはいま第三楽章冬の章
生クリームのせて春苺の卑屈

洒脱な比喩が冴える。金魚鉢という会社は定年で失せても意気軒高。第二句、著者の故郷は塩竈、東日本大震災では風評被害に難渋の筈。第三句、次は歓喜の第四楽章を迎える筈。第四句、生クリームがなくても十分なのだ。次の句集を期待。

山本鬼之介　選

水明集

天狼の青悠久の彼方より　高崎　原田秀子
櫂なくも船漕ぐ夫の日向ぼこ
色褪せし夫婦蒲団も日向ぼこ
揺り椅子の眠りを誘ふ膝毛布
うたた寝の夫へふはりと膝毛布

マジックの瞬間移動神の旅　さいたま　反町　修
期待され屋敷神まで旅立ちぬ
かくれんぼしてもつまらぬ冬の園
遥かなる初恋の味冬苺
火の番の拍子木の音澄みにけり

カーテンを駆くる鳥影冬うらら　さいたま　曲淵徹雄
虎落笛煤の艶めく自在鉤
もがり笛ときをり軋む腰の骨
寒空や磔刑めきし昼の月
棚上げにしたるてにをは燗熱く

冬近し尖り来る浪切るみよし　保坂翔太
産土は峡の村なり唐辛子
北条の九代弔ふ石蕗の花
里神楽ひよつとこを継ぐ伊達男
紅葉散る足湯に大根足が百

マリア像眼差す先に都鳥　村杉清吉
夕照の空に溶け込む都鳥
火事跡に半身焼かれし御神木
遠火事やなびく黒煙雲と化し
香り来る近所の寺の冬至梅

風呂吹の真白き肌に堆朱箸　梅澤輝翠
風呂吹のまつたりと載る織部の器
野菜干す笊の中まで雪催
鬼柚子の出番の時ぞ五右衛門風呂
遠洋の船に輝く聖樹かな

寄鍋の団欒の湯気はなが咲く
枯蔦の引つぱつて知る強さかな
枯蔦やはだか大樹の幹飾る
木の実踏む靴音楽し遊歩道
白菜を包む去年の新聞紙

さいたま　塩野久子

落柿舎に芭蕉の記憶紅葉散る
神の留守近江の杜の水時計
凍鶴の一声北の星零る
若水や墨痕滲む祝箸
初東風や今渾身のジェット音

日高道を

見ゆるもの皆モノトーン冬の雲
西方に隙間ぽつかり冬の雲
大根引く泥に今年の匂ひあり
都鳥立身の夢やはり夢
答へは新天地にあり冬の雁

青木鶴城

しりとりの言葉に詰まる炬燵かな
炬燵列車お国訛の賑やかに
枯蔦や廃墟に風の荒るるなり
実成る木の多き屋敷を小春風
わだかまりを残す別れや凝鮒

川口野田静香

賑やかな時は短かし山眠る
縁側に母の膝掛け針坊主
植込みの紅き色溶く霙かな
読み聞かす続きは夢で日向ぼこ
讃美歌のオルガンの音よ冬の星

熊谷越田栄子

仲之町抜けて近道酉の市
綿虫や喪中葉書が日に二通
「ル・モンド」で包む焼諸神保町
マチネーの切符余りぬ日短
古机磨き一輪冬の薔薇

さいたま　染谷正信

風音の乾き始むる冬はじめ
刀傷残る本堂虎落笛
転職の覚悟を固む虎落笛
焼諸に満つる黄金の力かな
風呂吹の芯に残れる火の匂ひ

上尾横山君夫

ぼんやりと曇り硝子に冬の蝶
クリスマスカードサンタのディスタンス
聴き惚るる降誕祭のジョン・レノン
粛粛と進む大社の年用意
窓を開ければ余韻たしかに夕霰

平塚丸屋詠子

久闊の何から話そ小春の日
仏前に供華を絶やさず返り花
唇にポインセチアの色をのす
樟脳の匂ひも被る黒セーター
「おたの申します」京の舞妓の事始

若狭　山﨑郁子

石蔵に燃えし証の蔦枯るる
撓むほど実る北限みかん山
寄鍋の能登より届く魚汁（いしる）かな
冬菜抜くGのマークの野球帽
縁起物抱いて地下鉄年の市

さいたま　渋谷きいち

思ひ出ぎつしり解れたるセーター
坂道の君に手を貸す冬苺
冬晴や今朝の霊峰どつしりと
遠秩父連山今朝は雪化粧
火事跡に恩師バケツを提げしまま

加藤でん治

冬菜畑血色のよき青き列
寄鍋や聞き役はよく笑ひけり
枯蔦が土塀這ひずる破れ門
寄鍋のお奉行様の国訛
枯蔦や電子回路か家系図か

新　暦文

人包みひたすら優し日向ぼこ
気に入りの膝掛抱へ書にあそぶ
傘一つ霙るる家路肩よせて
膝掛や心の余白埋めるなり
枯葉笛旅愁つのりし音の中

熊谷　神田治江

雪暗の風つき刺さるリフトかな
火渡りの儀式佳境に雪催
冬の街並虹色にそめ日の出かな
冬木立の命の鼓動聴診器
枝先は射光つかむや冬木立

さいたま　西幅公子

年用意髪切るだけの美容院
黙黙と集まる児童息白し
野仏の衣となりし草紅葉
喪の明けし倅一家と牡蠣の鍋
まだ聞かぬ初霜だより姫椿

杉戸　佐々木史女

冬霞ビルの谷間のクラクション
電飾の木々の整列十二月
雪雲や立食ひ蕎麦の券を買ふ
鯛焼の香に誘はるる塾帰り
鯛焼の匂ひが招く駅通り

さいたま　笹本啓子

うつむいて何か言ひたげ冬帽子　東京　石川理恵
冬帽子買ふ店員の誉め上手
着ぶくれてショルダーバッグ滑り落つ
悴みてボタンの穴の定まらず
縄跳びのかけ声弾む路地の奥

着ぶくれの並ぶ江戸城模型展　さいたま　橋本京子
霜の花松の廊下と杭立てり
冬うららビル睥睨す天守台
霜柱ざつくりくづす魔女の靴
根深汁むかしむかしは大嫌ひ

遠ざかる「やきいも」の声夜の静寂　春日部　仲田利子
西行の吉野の三年虎落笛
遠野物語神妙に聞く虎落笛
冬ぬくし木の根優しく抱き地蔵
風花や高みにありぬ津波の碑

待ち合はす美術館前霙降る　東京　鈴木和子
慶早戦の湧き立つ応援膝毛布
旅情ひとしほ手の届くかに冬北斗
汝が悩みちつぽけなりと星冴ゆる
目印は大寺の屋根や枇杷の花

朝日さす参道の黙冬木立　さいたま　斎藤みよ
着ぶくれ児自分の影に後退り
「蜂巣」てふ表札見つく霜の朝
擂鉢を押さへて母と納豆汁
捨て難し日誌代はりの古暦

うひうひし二人湯豆腐南禅寺　吉川　杉浦理恵
絵屏風に見入り夜更けし京の宿
湯豆腐で目覚めの一献宿の朝
誠実と書きし屏風の折れて立つ
目と眉の人相書や皆マスク

畑界解らぬままに葛葉生ふ　伊予　向井章子
入鹿駆けし古墳道とや返り花
焼き芋を待つは樹上の烏かな
父の忌や裸木となる大銀杏
寂しさを言葉に代へむ夜長こそ

昼火事や見物人が吸ふ煙草　さいたま　千坂平通
夜を徹し燃ゆる山火事地平線
都鳥川の流れに身を任せ
襟足の緑きらりと都鳥
幸せがこんなに近く日向ぼこ

「とーふー」と豆腐屋が来る冬の夕
俯くもあり学生街の冬の暮
武蔵野に木枯の森黒き土
大晦日どこか煙たき父が居て
靴音が追ひかけて来る冬木立

越谷　阿部幸代

冬木立夕暮れ空のモノクロ画
剥き出しの枝しなやかに冬木立
あるがままを包み込むなり除夜の鐘
籠りても聖夜の窓はにぎにぎし
華やぎの遠くなりにしクリスマス

さいたま　菅原真理

ホテルかと間違ふ院内聖樹の灯
受付で手を振る電飾雪だるま
冬灯院内ロビーに祈りの絵
担当医は気のいいおぢ様冬薔薇
山茶花や聖路加通りは好きな道

東京　太田絹映

鯛焼のケースの向かう幼児の目
降るを待つ富士の峰々雪催
み空より背に伝はる雪催
玩具売場に迷ふ祖父母のクリスマス
はやぶさ2冬の星から届け物

さいたま　竹澤和子

再びは会へぬ予感に銀杏散る
マンションのクロスワードや冬灯
駅広場枯木に花をLED
煤逃げの亭主等占むる読者席
年の瀬の鏡面歪む拭き残し

さいたま　本橋稀香

いつの間に廃屋の主花八手
親方の塩辛声や花八手
冬ざれの里山赤き木馬あり
江戸切絵図に鬼平辿る霜夜かな
工場の青煌煌と霜の夜

川崎　鈴木玲子

何んとなく潰してみたき霜柱
具の多きけんちん汁の田舎ぶり
真つ直ぐに空を突き刺す冬木立
四代を生きし証の賀状書く
北海の大地を吸ひし石狩鍋

さいたま　川村　治

雪もよひ足湯めぐりで血がめぐる
雪雲や湯が衣となる露天風呂
日の目見ぬ孫に送りし聖樹かな
病室を天使の形(なり)の聖歌隊
鯛焼や餡と肥満を天びんに

小川洋子

ポインセチア明るき妻はわが家（や）の灯
無気力な我に火をつけポインセチア
叱られて霜柱蹴り学校へ
霜柱崩しけんかの始まりぬ
霜柱バリバリ踏んで仲直り

さいたま　松田朋子

通勤の車窓に迫る雪催
釣り好きの父を手招く冬の海
谷川の出で湯の音の寒暮かな
喜寿近き再出発や冬の朝
クリスマス婿の手腕のローストビーフ

野村美子

トナカイの落しものですポインセチア
初霜のきらめきを行く犬の影
月中天ポインセチア微笑みぬ
ポインセチア我も我もと赤極む
寒風や人待ち岬無人なり

山下ユリ子

冬晴や飛行機雲のゆくへ消ゆ
逆光の夕富士透ける枯木立
クリスマス幼稚園めく介護棟
賀状出すや喪中はがきと入れ違ひ
十二月八日我が生いく曲がり

横浜　山岸弘子

柿むきの長さを競ふ母娘かな
風が来て軒を賑はす柿すだれ
名刹の仏を友に月を待つ
妙高も眠りにつくや鳶一羽
桐一葉悔なく生きて旅立ちぬ

さいたま　池田珪子

清らかに芙蓉は今日を終りけり
うつくしや鰯の肌の藍と銀
下戸のわれ憧れたるや酔芙蓉
高原や花野の色の鮮やかに
秋蝉の終の一声澄み通る

栃木　佐々木典子

華やかな時を秘めたる冬木立
思ひ出話つぎからつぎと日向ぼこ
三密を避けて今年の除夜の鐘
子へ贈るおもちや納戸に聖夜待つ
ドイツ語で第九堂々年の暮

さいたま　森下美智枝

冬ともし鍵穴さぐる指の先
冬ともし句の選評を読み返す
冬の灯や浦和街道影の濃し
寒灯や母の漬物石丸し
大過なくひとり年の瀬赤ワイン

高橋敏子

欅の葉我も我もと冬の暮
まつぼくり加奈陀から来てクリスマス
外灯が一つ切れゐる冬の宵
百八つ聞きつつ蕎麦屋蕎麦を喰ふ
武士道は死ぬ事なりと鎌鼬

さいたま　飯田忠男

目の前に嘘をつかせぬ冬の海
冬の海こころの奥処づかづかと
小上がりの時代炬燵で君を待つ
一夜さに風疾くなり冬の海
父の座の炬燵布団の色斑ら

川口　新井のり子

日記買ふ何時もと同じ五年もの
おだやかな日なれば障子開け放つ
しなやかな「櫓干し」てふ大根買ふ
日の匂ひ風の皺沁む大根買ふ
練馬大根守る一徹祖父の畑

蕨　細井良子

記憶なき書き込み二行古暦
オロナミンCの小瓶に実千両
通用口のカーテン白し十二月
粗相せる友の寝顔や雪催ひ
「故郷」の唱和で閉づる年の暮

さいたま　和田仁八郎

朝まだき大砲のごと鰤起し
出漁の掛け声響き鰤起し
分校の玻璃を震はす冬の雷
真二つにざくと白菜漲りて
男手のきしませ漬ける大白菜

暮れ六つの鐘里山に柿落葉
新聞に包み持ち行く寒卵
相槌の上手き女将や冬の暮
この味や旨き煮しめの年の夜
真つすぐに動かぬ瞳初鼓

さいたま　森　和子

膝掛けやパズルのピース隠れをり
黙々とパズルを埋めしひざ毛布
語り明かす二人気づかぬ霙かな
裏通り音連れて来る霙かな
膝掛けを丸めし犬も丸くなり

さいたま　緒方みき子

寄鍋や湯気の中より母の顔
枯蔦になすすべもなき無人駅
枯蔦や照る葉の日々へ想ひ馳せ
人混みを遠目に老いの年の市
膳に盛る母のレシピの冬菜漬

若狭　檜鼻ことは

篠崎紀子

ガラス拭き顔写し居り年用意
行き交ふや着ぶくれ知らぬ若い衆
手袋のまま立ち読みの週刊誌
冬木立青空仰ぎ一直線
黄一色銀杏落葉の道明かるし

東　京　柳父はる

もどかしく待つ間師走の交差点
ポケットに財布確かむ町師走
「元祖」てふ白い鯛焼餡透ける
通り過ぐ貨車の長さよ駅師走
極月の火元確かめ夜業終ゆ

さいたま　田中泰子

若人に体操習ふ十二月
朝散歩肺まで吸ひ込む寒気かな
千両や送りし人の顔浮かぶ
庭石に目鼻くつきり十二月
柊の花俳人二人入る鬼籍

和歌山　南條きわゑ

「おお」と声祥月命日返り花
電工は鉄塔の上冬紅葉
冬紅葉陶の狸もまぶしかろ
難病に効く記事の上蜜柑置く
コロナばやりの記憶は深し冬籠

横　浜　川島典虎

きりたんぽ入荷したぞと県人会
入院の主人(あるじ)待つかに帰り花
きりたんぽ湯気の向かうに山河あり
子供らの箸からにげるきりたんぽ
帰り花今年も咲きし空き家かな

さいたま　北出久美子

海縁の広き屋敷の石蕗の花
境内の大樹の陰に石蕗の花
ガラスドア写る黄色の石蕗の花
冬霞後姿が遠ざかる
お台場に御伽の国や冬の夜

武田重子

冬の山雲の去来と問答す
光陰の中に一つの蜜柑むく
老松にセーター着せたや海荒ぶ
山鯨漁師と猟師の酒一献
七輪と炭とエプロン母がいた

小　浜　松島寛久

足早の初冬の山荘は薪を割る
千切れ雲ゆるり絵地図を冬の空
今日ひと日過ぎてまた明日冬茜
卒寿てふ余生ゆるりと柚子湯かな
追想ももやーつと消え行く柚子湯して

東　京　河原叔子

昔日や菩提寺銀杏黄葉深し
冬木立子供元気に探検隊
三世代集ひしみじみ除夜の鐘
迷走の政治コロナ禍除夜の鐘
晴れ渡り社宅総出の餅搗き会

宮代　関谷多美子

根深汁両手で抱へはふはふと
凍て空の「はやぶさ2」は輝けり
昨日二羽今朝十羽居る池の鴨
放つといた論語抄読む冬安居
艶やかにお軽勘平十二月

さいたま　綿貫ひさの

想ひ出の庭の片隅青みかん
寝坊してただぼんやりと文化の日
コロナかな一キロ太り落葉踏む
北風が力いっぱい走りをり
去り際にゲータッチする小春日よ

水野興二

針運ぶ夜長の何と幸せよ
折鶴を数羽夜長の慰みに
初霜の降りたる畦を犬と我
うきうきとポインセチアの鉢飾る
コロナ禍やポインセチアの赤赤と

高原和子

虎落笛瓶の転がる番屋かな
横丁の壺の焼芋江戸仕込み
夜話の婆の声音や虎落笛
娘の笑顔焼芋頬張る道の駅
無縁仏あだし野駈ける虎落笛

春日部　諏訪サヨ子

宿坊の修業体験霙来る
心理士の温き言葉とひざかけと
駅前の立ち退き跡に霙降る
ひざかけの絵柄それぞれ双子かな
ひざかけを借りて御朱印乾くまで

東京　飯室夏江

冬の夜や一心不乱に編み進む
冬の夜に馳走を広げ起こす父
小言聞く見上ぐる窓に冬銀河
サンタクロース居ると信じる小五兄
コロナ禍に来訪断ちぬ年の暮

さいたま　山戸美子

今日は奔放島を取り巻く冬の海
冬の海荒れて更けゆく佐渡島
旅に見し佐渡の荒波冬の海
炬燵布団の花柄うれし六畳間
お上手ね炬燵にもぐり込む小犬

川口　田村福美

クリスマス褪せたる街に到来す
クリスマス真珠の指輪をねだろうか
幸せに形はありやクリスマス
車椅子聖夜の病棟滑走す
病棟は九時に灯を消し聖夜かな

東京　山中いちい

野沢菜も大根も洗ふ湧き水や
歯に優し嚙めばとろける大根かな
富士山の裾野に沈む冬至の日
冬至の日木星土星大接近
溶け込むや赤黄落葉と錦鯉

さいたま　小駒さち子

京の宿五人雑魚寝の堀ごたつ
姉の編む手さばき見惚れこたつかな
往く船に守り灯かざす冬の海
彼方より怒濤寄せ来る冬の海
潮騒のざわめきわれも冬の海

山岸久美子

花八ッ手宅配便にいそいそと
咳こみのひびきて夜半の北病棟
コンサートくさめもよほし飴さぐる
ウォーキング間隔とりて落葉道
預かりし子犬送りて日の短か

鬼石　榊原聰子

採りたての葉つき大根手に重し
厚切りのおでんの大根鍋の底
冬至の日早めに下山里の湯屋
日の暮れて冬至の夜会ベートーベン
欅枯る小枝の上の月白し

さいたま　木村るみ子

古寺のお守勤むる石蕗の花
仙人の棲む浅間山冬霞
寒風や銀ブラ無しにカフェ籠り
冬の霧べそかく吾子の母を追ふ
爆音や欅広場の落葉掃き

鈴木藻好

又しても鵯に先手の実千両
忙しやパパはサンタに早変り
帰り花そつと手に取り押し花に
咳一つ辺り憚り急ぐ下車
尻餅を二度も三度も芋掘る児

和歌山　嶋田洋子

しきたりを一つ外して年用意
日課こなす朝の体操霜の花
返り花子の頃仇名本の虫
着ぶくれて年下なれどいぢめつ子
どの人も美男子に見えマスクして

いすみ　平石睦子

冬至湯に身軽になりし体浮く
去るものは皆もう去りて冬至風呂
生きてるだけは死んだも同じ冬至風呂
柚子の湯や生きてるだけで丸儲け
妻何か言ひて出掛けし師走かな

町田　瀬戸雄二郎

クリスマス通りすがりの飾り窓
凍てる夜改札前の待合せ
信号が変り飛び出す年の暮
石蕗の花古刹の一隅なほ静か
冬霞畑に人の影おぼろ

さいたま　湯浅　和

地にかへる朽葉の暗さ見てをりぬ
冬入日心せかるる何やかや
冬桜雲の濁りて来たりけり
焔(ほむら)ともなる一言や冬深し
静かなりなんと静かに山眠る

小山敦子

たつた一つの漁火消えて冬の海
「よつこらしよ」と八十路の炬燵声で立つ
おしよろ丸二十歳の首途冬の海
カルピスと炬燵で始まる姉の恋
孫も来ぬコロナの炬燵コップ酒

藤岡真知子

何時もより燥ぐ子の声冬至風呂
軒並の干大根や村静か
スムーズに生す大根の桂剥き
餅搗や用意の米を研ぐ前夜
北国に住む心掛け初雪に

さいたま　岡田宣子

呼出しのリズムが誘ふ焼芋屋
子等遊ぶ日暮る田畑冬めける
羽衣の松に菰巻く空の声
放つ矢の耳元掠む虎落笛
木木の枝(え)のジャブの応酬虎落笛

安倍弘夫

青竹の葉に御祝儀の鰤届けらる
忘年会仕上げの紅を急ぎ足
義士進む江戸の城下や月冴ゆる
平城京栄華の記憶落椿
垣根越幼子の声春隣

草加　外村紀子

菊枕作つてみたくてほぐす花
立冬や川波尖らす風唸る
短日や愛の鐘鳴る医者帰り
コロナ禍や閉店遠近年の暮
「生き過ぎた」笑つて湯豆腐掬ひたり

藤沢　小島喜代子

瑠璃の帯流し大淀冬青空　大阪　飯塚智恵子

柊の花の愛しき齢かな

山茶花やひとつ余さず咲ききつて

アパートの壁陰黄菊うらうらら

時折の母の繰り言隙間風　若狭　岡本祥子

冬うらら期末迎への通学生

リーダーの見極め上手冬雀

寒鰤の巷の苦悩汲む眼

小春日や若き庭師の脚立のび　東京　畑宮栄子

ミステリーのページ繰る音霜の夜

冬の空吸ひとつてゆく大夕日

霜除を立てし庭師の白き指

灯油売りひねもす巡る十二月　大阪　遠藤人美

こだはりの先の達観冬木立

百均の聖樹眺むる夜のしづか

帳面と辞書に歳時記年歩む

裏庭の白南天に風強し　鬼石　加藤ナヲ子

上州の風にゆれゐる大根葉

父植ゑしみかん山盛り籠ふたつ

麦の芽や背のびしてゐる畑の隅

酉の市阿亀火男華添へし　さいたま　福田育子

お多福に負けぬ笑顔や酉の市

寄せ鍋やお国訛りのうから寄り

一幅や山裾の里柿すだれ

冬銀河地球にとどく「玉手箱」　和歌山　髙橋満耶子

保育所へマスクのサンタ現はるる

豪雪や長蛇のくるま立往生

行く年の胸にずつしり「密」の文字

着ぶくれの妻の指図の達者なり　東京　水落守伊

着ぶくれて無理矢理詰まるバスの椅子

着ぶくれの胸を弄くる聴診器

着ぶくれて漸う立ちて事忘る

寒波来る講座の荷物まだ着かぬ　和歌山　葛城千世子

十二月家元講座はじまれり

語らひつ朝食をとる浮寝鳥

水鳥や早起き組の和やかに

白みゆく坂東太郎寒霞　小川　藤間友二

ほつほつと火落す屋台冬の月

歩み来し人生苦楽老の春

コルビュジエの屋根に冬至の月昇る　さいたま　横山礼子

夜の底に潜む冬至の星を摘む

塗り椀に大根盛れば早や温し

少女の掌うすくれなゐの雛霰　所沢　関根千恵

反想のあひたい人よ春ひとり

たまゆらの羽根をやすめる春疾風

暮早く急ぐ足並スクランブル　さいたま　落合和枝

雪もやう庭の小花は懸命に

冬雷や技の美容師大きな手

初日の出今年も無事を願ふ朝　工藤信子

初詣行列続く大参道

初詣絵馬に一願書き納め

寄せ鍋や竹馬の友と時忘る　春日部　増田静司

筑波山夕日に染まる赤紅葉

寄せ鍋やおやぢ偲びて一人呑む

ドキドキの朝冷たき体温計　さいたま　樋口元美

軒下に光る大根原風景

味しみてことこと大根煮くづれる

東日本大震災から10年
いま、思うこと
特集

❖巻頭三句
寺井谷子
能村研三
稲畑廣太郎
三木星童
中田水光
深沢暁子

❖俳句と短歌の10作競詠
相子智恵
佐藤モニカ

❖その時、俳句手帳
名和未知男

❖今月の華
秋葉舟生
江中真弓

❖好評連載
南伸坊　猫の俳句
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西朋　俳句へのまなざし
神作研一　手のひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
酒井佐忠　本の窓辺
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2021年3月号
2月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

作品評

山本鬼之介

櫂なくも船漕ぐ夫の日向ぼこ　原田秀子

縁側かそれとも冬日の差し込む茶の間であろうか。気持良さそうに規則正しくこっくりこっくりやっている夫を、優しい眼差しで観察している妻。その内に、勢い余って転がってしてしまうのではと、僅かながらの心配もあるが。

日常他の家庭でも見られる光景かも知れないが、それを、このように俳句で表すことは珍しいと思う。中七から下五の措辞だけでも申し分ないが、圧巻は上五である。老境に入った夫婦について、いろいろと問題が提起されている世情ではあるが、互いに相手を信頼しあって安らかな日々を送っている理想的な老夫婦の姿を目の辺りにした思いである。

マジックの瞬間移動神の旅　反町修

手品の瞬間移動と言えばトランプなどの小道具を用いたものが一般的で、素人でも楽しめるように安価な用具が豊富に販売されているが、本句が取り上げているものは、そんな生易しいものではなく、人間が一瞬のうちに消えてしまって全く別の場所に現れる「人間瞬間移動」であろうと思う。そうなると手品というよりも、まさに大魔術と言われる範疇のものであろう。

季語「神の旅」は、全国の神々が出雲大社に集結するというまことに壮大でほほえましい語意である。飛行機や新幹線を使うことなく、あっという間に行き来出来るのだから。まさに神業である。神の旅をマジックの瞬間移動に結びつけた独創性を評価したい。

カーテンを駆くる鳥影冬うらら　曲淵徹雄

冬の陽射しがたっぷりと降り注ぐ洋間のカーテンに、外で羽搏く鳥の影が写っている。ただそれだけの内容であるが、この躍動感に溢れた詠み方に注目した。時には、窓ガラスを突き破るような激しさの動きが表現されている。カーテンを地上に見立て、戦場を駆け巡る奔馬のように詠んでいるのが圧巻である。

冬近し尖り来る浪切るみよし　保坂翔太

十一月も半ばを過ぎて空が曇り、波が荒くなってきた日本海を思わせる。持ち上がってくる波を切って進む和船の健気

な姿が、舳（みよし）によって明らかになり、小さいながらもきりりと引き締まった船の姿が見えてくる。

火事跡に半身焼かれし御神木　村杉清吉

御神木は、神社の境内の中で縁故のあるものとして特別に祀られる樹木で、注連縄を張ったり柵を設けたりして管理されている。千年杉とか千年公孫樹などと呼称され、大人数人が手を繋いで樹の太さを測ったりする巨木もある。

さて、何処の神社か判らぬが、神殿の火災が永年に亘って神社を見守ってきた御神木にまで類焼し、白日の下に無惨な姿を晒している。落雷に直撃された樹から若葉が芽生え、夏には青葉になるように、この御神木も半身ながらも生き続けることであろう。

風呂吹の真白き肌に堆朱箸　梅澤輝翠

堆朱（ついしゅ）は、彫漆[陶器や木地に漆を厚く塗り重ね、彫刻を施すこと]の一種で、木地の表面に朱漆を幾層にも塗り重ね、その表面に山水・花鳥・人物など、いろいろの模様を浮彫状に表す技法である。

彫漆の技法は、平安末期から鎌倉時代にかけて中国から渡来したようで、日本では新潟県村上市の堆朱が、この地の名産品として、現在もその技法が受け継がれている。

綺麗に面取りした大根を熱々に煮た風呂吹と、堆朱箸との取合せには実に風情があり、一段と食が進むことであろう。当然のこと、村上の銘酒「〆張鶴」も欠かせぬ逸品である。

白菜を包む去年の新聞紙　塩野久子

昔から野菜を保存するのに新聞紙が便利に使われている。野菜をそのまま新聞紙で包んだり、濡らした新聞紙で包んだりして常温保存する方法が採られている。一般常識を詠んだ俳句ではあるが、注目すべきは、「去年の新聞紙」である。一般的に古新聞は、広告紙などと一緒に、資源ごみとして出してしまうから、秋を過ぎて去年の新聞が残っていること自体が珍しい。読者に「何で」と思わせるところが俳句の面白味であろう。

神の留守近江の杜の水時計　日高道を

近江神宮の御祭神・天智天皇が、六七一年に水時計＝漏刻を作らせ、大津宮で鐘鼓を打って時報を開始したという記録を題材にした俳句であるが、現在我々が当り前に用いている様々な時計と対比して考えると、なかなか意義深いものを感じる。

西方に隙間ぽっかり冬の雲　青木鶴城

空全体を覆う陰鬱な雲ではあるが、西の空に雲の切れ目があり、そこから夕陽が射している、という景色を想像する。西方は西方浄土に繋がり、抹香臭さを拭えないが、一方で、閉ざされた心の開放感をイメージしているように受け取れる。コロナウイルス問題で悩みの多い当今に、一縷の光明を暗示する俳句と受け取った。

炬燵列車お国訛の賑やかに　　野田静香

以前のこと、地方都市の某駅のホームで列車待ちしていたら、貸切の観光列車が臨時停車した。中を覗き込むと、乗客が皆炬燵に入り、カラオケで酒宴の真っ最中であった。掲句を読んで、その時の光景が直ぐ浮かんできた。客車内の歌声がホームに流れてきて、自分も参加したい気持でいっぱいだった。方言丸出しの人達との宴会はさぞかし楽しいだろう。

読み聞かす続きは夢で日向ぼこ　　越田栄子

冬の陽射しがいっぱいのリビングルームで、幼児に童話の絵本を読んでやっている。その内にその児がこっくりこっくりし始めた。そっとソファーに横たえ寝かしつける。きっと夢の中で絵本の中のお姫様になっているだろう。

古机磨き一輪冬の薔薇　　染谷正信

永年愛用してきた文机であろうか。一念発起して隅々まで掃除し、ワックスを使って磨き上げたら、古いながらも見違えるように綺麗になった。深紅の薔薇一輪は、文机への感謝の気持である。

転職の覚悟を固む虎落笛　　横山君夫

現今では、転職が日常茶飯事のように行われているが、昔気質の人にとって、転職することは相当覚悟の要るものであろう。転職候補先の面接を受けての帰途、不気味な音を立てて荒れ狂う虎落笛を聞いて何故か迷いが解け、「よし転職するぞ」と決心した。

クリスマスカードサンタのディスタンス　　丸屋詠子

ソーシャルディスタンスは、新型コロナウイルス感染症問題が持ち上がった一年前に提唱されたもので、自分と相手への感染を防ぎ、日本全体の感染拡大を防ぐための社会的距離の確保である。目安として二メートルの距離を取るとされているが、現実感としてこれを実行するのはなかなか難しい。

さて、本句のそれは、何人ものサンタクロースが描かれたクリスマスカードであるが、サンタ同士が遠からず近からず、程良い間隔を保っているように見受ける。当結社においてもコロナ俳句が多いが、このようなスマートに詠まれた俳句に

出会えてほっとしている。片仮名の中に埋もれたたった一文字の平仮名が、ダイヤモンドのように輝いている。

唇にポインセチアの色をのす　山﨑郁子

口紅の色を具体的な色名や色調ではなく、花の色で表したことがお手柄である。ポインセチアは、クリスマスの頃によく出まわる花で、花の色は赤のほか桃色や白などがあるが、この句の唇に載せる色は、やはり代表的な赤であろう。口紅を使っているひとの心の高揚感が伝わってくる。

冬菜抜くGのマークの野球帽　渋谷きいち

先ずこの人物の年齢を考えた。「冬菜抜く」の語句から想像して、少年時代から巨人軍一筋に生きてきた老年期の男性と見た。読売ジャイアンツの職員ではないが、出かける時はGマークの野球帽を被る癖が付いているがちがちの巨人ファンだ。付き合ってみると味のある人だと思う。

思ひ出ぎつしり解れたるセーター　加藤でん治

男であっても着慣れた衣類は捨て難い。ましてや、本句のような思い出が詰まった愛着のあるものは尚更である。愚考するに、むかし思い人から贈られた手編みのセーターかも知れない。古女房も、亭主の様子からうすうす感づいているだろう。表にはみ出た毛糸の先を裏側に押し込んで、毎年のシーズンに大事に着てきたセーターである。破調が効いている。

寄鍋のお奉行様の国訛　新暦文

どういう訳か鍋物になると男が張り切る傾向がある。筆者の父がその典型で、鋤焼になると生き生きと奉行役を務めていた。吾も然り。この句の場合は寄せ鍋なので具材の種類が多く、それなりの技が必要なのだろう。お国自慢の材料の一つ一つに講釈を述べ、鍋の中にきれいに配置してゆく。親しみ深い訛も、具材の一つである。

年用意髪切るだけの美容院　佐々木史女

女性と美容院、男性と理髪店、どちらも年用意の一つである。髪を切るだけのために美容院に行ったという物淋しさと、その裏側にあるさばさばした女心が伝わってくる。

江戸切絵図に鬼平辿る霜夜かな　鈴木玲子

霜が降るような寒い夜。江戸の市街地図を広げ、小説に記されている鬼平の足跡を辿って行く楽しいひと時である。

四代を生きし証の賀状書く　川村　浩

昭和が永かったから、四代を生き抜いたことは大変貴重である。一枚一枚手書きの年賀状に、その人の魂が宿っている。

水琴窟

（水明集一月号鑑賞）

池田雅夫

晩秋の雑木林の風静か　千坂平通

「初秋・仲秋・晩秋」を三秋といい、秋九十日間を九秋と称する。秋も深まり、やがて冬の気配がただよう「晩秋」は風の音にもの寂しさを感じる。木の葉を散らす風がピタッと止むことがある。そんな天候の変化を存分に感じている。

切り通し過ぐれば風の野菊かな　田中泰子

「風の野菊」の表現力に感心した。小高い山や丘を道の分だけ切り下げた「切り通し」は人の往来や風までも通り抜ける。勢い余った風は道端の可憐な野菊を揺らしている。一句一章の読み切りが風の強さを表わしているように思う。

薄墨の文したためて二日月　鈴木玲子

「新月」「二日月」は、太陽に近づきすぎて太陽の明るさに負けて、ほとんど見られない。「薄墨の文」から推察すると、何やら不幸があったのかも知れない。「薄墨」と「二日月」が絶妙に呼応している。明日になれば月は見られるが。

いささかにかたき団子や居待月　檜鼻ことは

月を愛でる風習は古くから伝わっていて、仲秋の名月は格別である。満月の後も、「十六夜」「立待月」「居待月」などと、月の出を待つ心情を表わす。次第に団子も固くなる。

稜線に連なる棚田秋夕焼　鈴木藻好

棚田は山間地域の特徴的な形である。尾根に近い水源をたよりに水を引き、階段状に田を創ったものである。その山際が夕焼けで真っ赤に染まっているのだ。夕焼けの充実感に棚田の稲の豊作を窺うことができる。稔りの秋の到来だ。

水面ける塩辛とんぼ朝の堀　森下美智枝

とんぼの飛行は独特な習性がある。空中静止、「ホバリング」といわれている。その技を巧みに駆使して何回も、尾で水面をたたくようにして卵を産みつけるのである。「水面ける」の措辞が独創的で、よく観察したことの証しである。

大気圏までとどけと背伸び秋の天　小川洋子

「秋の天」は澄みきっていて際限がないほど高い。その空に向かって思いっきり背伸びをしている。つき挙げた腕がどこまでも伸びていくような錯覚を起こす。上五の大胆な字余りも、一気に読むことで全く気にならないのが不思議。

月光や彼の流刑地の能舞台　岡田宣子

隠岐の島には後鳥羽上皇、佐渡ヶ島には順徳上皇など、配流の地には京の文化が根強く伝わっている。その中には能楽や浄瑠璃などがある。かつての雅の世界の痕跡をとどめる流刑地の能舞台。それを冷やかに月の光が照らしている。

柿を誉め柿の蘊蓄聞く破目に　水落守伊

柿の原産は中国揚子江流域で、それが日本に輸入されたとされる。また、日本にも同属の自生種があったという説もある。もともと渋柿が主で、次第に甘柿が好まれ栽培されてきたという説など、柿にまつわる逸話は切りがない。

野良猫につられ裏口秋の風　飯塚智恵子

「野良猫」といいながらも庭先や縁側で餌を与えている人が少なくない。頻繁に裏口を出入りする猫の光景を見かける。「野良猫につられ」は、秋の風であろうか。ぽかりと空いた猫の抜け穴。秋風がしのび寄る。人もつい引き寄せられる。

秋うれひ独りよがりの昼の酒　畑宮栄子

「独りよがり」は、独善ともいう。自分だけでよいと思って他人のことを頓着しないこと。秋のものさびしさに堪えきれず、昼の酒を正当化していることこそ秋思と云えよう。

読書終へほつと一息菊香る　遠西勢津子

とある穏やかな日、窓辺に寄って読書に没頭している。周りの音も耳に入らぬほど充実したひと時。ようやく本を読み終えて「ほっと一息」、深呼吸をしているのだろう。菊の香が、さらに満ち足りた暮らしぶりを表わしている。

晩秋の道足早に暮れゆけり　田村福美

秋もいよいよ深まり、どことなく冬の気配を感じるころ、西に傾く太陽も急ぐようにビルの陰に隠れてしまった。「足早に」は道ゆく人の気持ちをも表わしているように思える。二つの意味を示唆することで、より深い句となった。

しほさゐのはるかに富士の雪化粧　関根千恵

和歌にある山部赤人の「田子の浦ゆ…」を思い浮かべる。が、田子の浦は近すぎて「はるかに」にそぐわない。別の場所であろう。目の前の「しほさゐ」と「富士」の遠近がみごとに表現され、雪化粧した富士山の雄壮な迫力に圧倒される。

故郷のリンゴ久しく丸かじり　増田静司

りんごの産地として青森県、長野県などが有名である。大胆にりんごを丸かじりして、若いころの思い出に浸っている。「林檎」の漢字表記にすると、より郷愁に誘われる。

大村節代　選

鼓笛集

春浅しホロとやさしき黄身時雨　原田秀子

生姜湯にほつと一息炉を惜しむ
白き灰ふはりと残し炉蓋する

薄く浮く富士は崩れず寒の入　曲淵徹雄

陽光に思はず縋る冬の蝶
佇める異国の裸像冬の雨

小一の先生は卒寿賀状受く　松島寛久

初風呂に産まれ変つて星満天
初空にはやぶさ2の雄叫す

大通り空缶走る寒の入　西幅公子

寒の入風の忍者の住む我家
ぽたりぽたり解け出す山や春を待つ

母の手に包む児の手や雪催　橋本京子

初日差す路地へ赤児の一歩かな
枯芝や大奥の跡赤児這ふ

はらはらと芝生を埋める冬紅葉　鈴木和子

名刹の床を染めたる冬紅葉
時雨聞く潤ひ欲しき六地蔵

夢描く空の賑はひ凧日和　野田静香

蒼天に即かず離れず親子凧
魂を凧に預けて風まかせ

重なりし手の恥ぢらひや冬桜　仲田利子

逆上りやつと出来たよ冬桜
一山をほんのり染めて冬桜

初春や暗夜の先の水明り
薺粥面会出来ぬ母のこと
明けの春まだ静かなる神の杜

猿島の武器庫の跡や枯尾花
若妻は農学部卒冬苺
淑気かな千年杉に朝日差す

春隣聖鐘響く砦あと
猫の子や戦禍に残る石の門
石畳続く町裏雪解水

落椿舞妓のかざす洛の道
金剛の寒九の気迫蔵王堂
小走で通ふ菊坂雪明かり

敗れたる平家落人柿実る
映画館看板朽ちて冬来たる
アマゾンの大海原や初日の出

初夢に見る友垣の皆若し
古事知らず郷の無住寺初詣
初日記金釘流の晴れとのみ

日髙道を

梵鐘の音包み込む冬霞
幼子の万歳の声初み空
境内に霊水を汲む寒椿

保坂翔太

食卓に残り物のせ女正月
コロナ禍いま句友の恋し春遠し
梅ほんのり香りこぼして咲きはじむ

田中泰子

コロナ禍の世は索漠と寒波来る
寒入りや鷺茫然と立ちつくす
巨大なる寒ぶり大漁みごとなり

外村紀子

通勤の車窓に迫る雪催
釣り好きの父を手招く冬の海
喜寿近き再出発や冬の朝

千坂平通

海岸を走る車や初日の出
屋上に登りて夫と初日待つ
三歳の孫に年玉五百円

水落守伊

武田重子

寺内洋子

南條きわゑ

野村美子

高原和子

鼓笛集作品評

大村節代

春浅しホロとやさしき黄身時雨　原田秀子

時雨は初冬の季語だが、和菓子の黄身時雨は春を感じさせる。黄身時雨は、卵の黄身餡に包まれて、その餡の皺の隙間から漉餡の見える様を時雨に見立てて名付けたと言う。

一仕事終えて頂くお茶と黄身時雨。中七が黄身時雨の様を何ともぴったり、さりげなく表現している。さるやの黒文字を添えてさあどうぞ。

薄く浮く富士は崩れず寒の入　曲淵徹雄

寒の澄んだ空に富士山が見える。日本人は富士山を見ると何故かほっとする。遠くにとか、遥かにとかではなく、薄く浮くの上五は、誠に心憎い表現で、作者と富士山との距離が静かに伝わる。

鼓笛集巻頭（二月号）

私の好きな一句（自句自解）　保坂翔太

浮雲に乗りたる心地青き踏む

ふわふわとした浮雲、雲に乗ったらどんな気分になるだろうか。柔らかな土に生えている青い草の上を、目を瞑って歩いてみる。まるで浮雲の上を歩いているような気分になる。

山々に囲まれた田園は心をなごませ、大らかな気持にさせてくれる。

小一の先生は卒寿賀状受く　松島寛久

卒寿の先生からの賀状に、心からほっとして喜ぶ作者。良かったですね。

実は、私は今年で賀状を終りにしますという年賀状を何枚か頂いた。賀状は互いにまだ生きているという確認のようなもので、何とも淋しい。作者は、今後も先生が白寿いやもっと長くお元気で賀状を頂ける様に祈っている。

『俳句四季』令和三年二月号

冬の彩り

山本鬼之介

チェロ負ふ少女恩賜の森を冬はじめ
小春日や芋やうかんの口触り
朴散るをはじめからをはりまで
引退の投手冬めく芝を踏み
芭蕉忌の雨の予報がくつがへる
石蕗さくや双子のやうな従姉妹
息継ぎの艶めく歌手よ冬薔薇
大根の辛み貴し朝ごはん
濃霜から解き放たるる数寄屋下駄
ひめつばき利休・宗久いまあらば
夕しぐれ松の位の遊女塚
許嫁てふときめくことば冬の鵙
夜半の冬ふむふむふむと「江戸仕種」
昔ならめ組走るぞ遠き火事
アパートの縁に令和の枯芒
「岸壁の母」のがんぺき虎落笛

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
境延昭報

遠目には金の日溜り枯芝生　稀香
たくましき命の証青木の実　チアキ
路地裏に昭和の匂青木の実　由紀子
花金も沈みがちなり冬夕焼　和葉
冬晴や色を転がす金平糖　マスミ

―以上特選

楽しさは庭の隅より青木の実　由紀子
めでたさや雑煮に浮ぶ金の箔　稀香
母の家の裏戸より入る青木の実　順子
青木の実閉ぢしままなる勅使門　延昭
茅屋（ぼうをく）の隠れ耶蘇とや青木の実　節代
金盃の屠蘇にほろ酔ひ放歌せり　はるみ
坪庭や灯に映ゆる青木の実　徹平
幾代も見守り続く青木の実　チアキ
琴の音の時に烈しく青木の実　和葉
風花や金象嵌の鉄剣銘　マスミ
青木の実木木の間に間に師弟句碑　和子

第二例会（東京本所）

太田絹映報

波の果てあれは鯨かひようたん島か　いちい
嫋やかに銀波乱して鯨ゆく　昌弘
小正月長押に下る割烹着　〃
体重計自問自答の小正月　敏江
海に飽き天に挑める鯨かな　峰雄
鯨鳴く夜は潮騒荒ぶれり　竺仙
ゆつたりと地球を回す鯨かな　鶴城

―以上特選

カザルスを聴きうたた寝の小正月　峰雄
柔軟剤の香りのパジャマ小正月　みどり
父来たり鯨ベーコン麦焼酎　陽子
訪客にアルバム開く小正月　いちい
「鯨のたれ」食べつかと安房訛り　竺仙
家族皆事なきを得て小正月　玲子
小正月足をのばして浅草へ　禮子
七度の年男なり丑の活く　鶴城
甲高く哀しみ籠めて鯨泣く　昌弘
壮大なジャンプ光るやはつ鯨　敏江
宝くじ買ふ列に付き小正月　絹映

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄報

初句会古き絵羽織一つ紋　喜久
一嵩となりし米寿の初寝覚　〃
旧姓に戻りしきみと初句会　萬蝶
見得を切る諸肌脱ぎの大枯木　昇

―以上特選

パート女ら労の笑ひも重詰し　理恵
よそゆきの身形に笑顔初句会　雅夫
初句会何はともあれ出席す　岡野順子
鯉が跳ね寒夜の池の深呼吸　祥絵

待春の何か蠢く潮だまり　大場順子
いつもより紅を濃い目に初句会　萬蝶
備長炭のあかあかと燃え福沸　喜久
なにとなき冬のもの音朝の床　徹雄
初夢に兄と富士五湖巡りけり　康世
一病の声を励まし初句会　昇

第四例会（浦和）

境　延昭
石井喜恵　報

冬晴や指呼に立つ富士父性めく　玲子
噴煙は太古の息吹冬晴るる　〃
冬晴や島々を縫ふ定期船　マスミ
七種粥のさ緑分かつ夫婦椀　昇
七種の粥に齢の青みゆく　順子
冬晴の空にぽつこり吸ひ込まれ　恵子
寒晴や分水嶺に手を翳す　寛治
晩節のよき塩加減七日粥　由紀子
——以上特選　昇

軒下に豆腐の拉ぐ寒日和　延昭
冬晴のビストロに立つ三色旗　光子
手洗ひとマスクに慣れて冬うらら　暦文
冬晴や出雲大社の日章旗　でん治
冬晴や秩父連山一望す　修
冬晴や庭に戯る紅白帽　玲子
行平の恵みゆたかな若菜粥　寛治
冬うらら五百羅漢は猫背なり　光弥
櫓太鼓宙に音撥ね寒の晴　翔太
冬うらら都電一日乗車券　順子
冬晴や果てなく澄める鳶の笛　マスミ
冬晴に雲の百態海の原　恵子
馬小屋に拡ぐる寝藁冬日和　喜恵
玉砂利に己が影踏む寒日和

第五例会（浦和）

梅澤　佐江
河野はるみ　報

若冲の鶏鳴を聞く初枕　玲子
初夢や富士の向かうに郷の山　はるみ
初夢や手の切れさうな贋紙幣　美佐尾
初夢を言ひ惜しむ間に忘れけり　水尾
冬深し耳聡くなる夜の家鳴り　佐江
——以上特選

初夢に亡き人もゐる酒宴かな　義子
初夢に果たせぬ恋のエンディング　理恵
わびさびの枯山水や冬深し　玲子
冬深し血流悪き足包む　水尾
冬深し部屋の明かりと笑ひ声　はるみ
身を包む釜飯の味冬深む　美佐尾
やんごとなき君の通ひ路夢はじめ　佐江

若松例会（京橋）

石田慶子
正木萬蝶　報

白身切る丸き菜箸寒卵　月を
寒卵飾りにつかふ網代籠　ひろこ
白粥に落とす無双の寒卵　佐江
誕生日二個は多いか寒卵　はるみ
母子手帳受け取る朝の寒卵　萬蝶
——以上特選　月を

割り皿の釉薬濃し寒卵　千春
減らすこと叶はぬ薬寒卵　俊晴
丑年のお飾りつけて三輪車　はるみ
始まりは寿老人より初詣　鶴城
試験日の双子の黄身や寒卵　倭子
黄金色に輝く朝の寒卵　慶子
病む夫の喉ゆるゆると寒卵　ひろこ
引き窓の光朝なり寒卵　理恵
泣くもんか拳握る子寒卵　佐江
しらたまの命の重み寒卵　マスミ
寒卵呑みて乗り出す夫婦海女　知子
献血に並ぶ若者寒卵　萬蝶
冬薔薇や昨日まで造花だつたのに

関西例会（大阪）

森本早苗　報

寒に入るビビューンと唸る二重跳び　早苗
ゆく年の声なき声に耳すます　玲子
一張羅の帽子飛ばすや寒四郎　千津子
起き抜けに寒九の水を先づ一杯　敦子
千仏堂一灯捧ぐ寒さかな　ゆら女
寒を生く寒鯉のごと息ひそめ　和子
大寒の雲を突きあぐ避雷針　道子
新築の寺より響く除夜の鐘　千枝子

飴色の切干纏ふ陽の匂ひ　早苗
海峡に鳶の輪二つ寒入日　玲子
初雪や先づ一服の緑茶乾し　礼子
見掛け良し有毒と聞く冬珊瑚　千津子
電線を唸らせ震はせ寒波くる　敦子
天井をミッキーミニー嫁が君　ゆら女
年始客帰りひとりの茶漬かな　洋子
寒の街豚骨スープと親爺かな　智恵子
マフラーは白と決めたる女学生　千世子
コロナ禍の世は索漠と寒波来る　きわゑ
瑞兆か雪かむる樹へ鶴　和子
裸木の投網にかかる昼の月　道子
白波立つ南紀の海や寒に入る　千枝子

――以上特選

☆　☆

昔話あれこれ

枯野の琴

仁徳天皇の御代に、免寸（大阪府高石市富木）川の西に一本の大樹があった。その樹の影は、朝日に当たると淡道島（淡路島）に及び、夕日に当たると高安山（生駒山山系の山）を越えた。この樹を切って船を作ったところ、高速で走る船になった。その船に「枯野」と名を付けた。淡道島の清水を汲み、朝夕この船で運び天皇に献上した。

やがてこの船が傷んだので塩を焼く燃料にし、残った樹で琴を作った。その琴の音は七つの村々に響き渡った。

人々はこの話を次のような歌にした。

枯野を　塩に焼き　しが余り
琴に作り　かき弾くや　由良の門の
門中の海石に　ふれ立つ
なづの木の　さやさや

＊海石（海中の隠れ岩）
＊ふれ立つなづの木
（波に揺れ動いている海草）

なんとおおらかで豊かな話であり歌謡だろう。

人々が畏敬の念を持って仰ぎ見上げ、枝葉を豊かに茂らせる一本の大樹があり、この大樹から作った船は、瀬戸内の島々を縫って矢のように走り、海辺には海水から塩を作る人々の生活がある。

穏やかな瀬戸内の由良の門では、海草がゆらゆら揺れ動き、神聖な「枯野」の樹で作った琴からは、爽やかな音が七つの村々に響き渡っている。

この話は、『古事記』下巻の仁徳天皇のエピソードの一つである。そして大樹伝説の類型的な話であり、仁徳天皇を聖帝として語る瑞祥説話でもあるという。

『古事記』は日本最古の歴史書・文学書といわれるが、神話・伝説・歌謡に残された古代人の心（文学）に魅力がある。

（なお、『古事記』中巻、仲哀天皇のエピソードの中で琴は神のお告げを聞く呪器として描かれている。）

（丸山マスミ）

各地句会

繭の会（浦和）

寒中に遠く瞬く赤色灯　京子
身構へて飛び立ちさうな福寿草　和代
湯たんぽの残る温もりあと五分　文子
福寿草人なき庭に人を待つ　孝男
寒の内夫には見せぬ領収書　月を
代々の床の間の軸元日草　鶴城

若鮎句会（浦和）

公園に幼な子の声寒日和　芳江
寒中の日差しにとける汁粉の香　さなえ
裏白や父母の長寿を祈願する　幸代
ごぶさたのすき間を埋むる寒中酒　まり子
さし出す手と笑みと企みお年玉　みえこ
裏白をかざる父の手ささくれて　万美
裏白に居住まひ正し青畳　喜夫
文庫手に羊歯をしをりの冒険す　順
嫁ぎ先の床間裏白のひかり　月を
天神へ日ごと賽銭寒の内　鶴城

水明松本句会（松本）

時雨るるや拭ひし猫の又濡れて　恒子
風習を七草粥でくぎりつけ　陽子
バーゲンも初売りさへもオンライン　マリス
「サクラサク」のライン待たるる受験生　玲子
箸紙に書く名ほのかに墨匂ふ　寿子

柿の木塾（浦和）

むさしのの寒林しづめ禅の寺　光弥
寒林や富士の裾野に戦闘機　節代
福寿草充ちて赤子の生れけり　かつ子
寒林を仰ぎし先に星の綺羅　和葉
寒林に子猫の爪のごとき月　水尾
冬鷗低く飛び交ふ北の街　俊晴
佐渡遥か出船に縋る冬鷗　昇
走り根は樹木の署名寒林ゆく　恵子
寒林の一樹は父の背と想ふ　和子

珊瑚の会（浦和）

寒四郎石屋に数多の鑿（のみ）と槌（つち）　広子
指先を噛みて手袋外しけり　和葉
寒の水ゆたかに使ひ藍工房　かつ子
百度踏む歩幅小さく寒の寺　喜恵
寒九の湯身ぬちの澱を解きほぐす　マスミ
寒四郎喝采のなき巫女の舞　水尾
農小屋に風の棲みつく寒の内　昇
指先のぱつくりと切れ寒四郎　恵子
寒中の陽を一身に受け生きむ　史代
指ぐせの残る母の革手袋　和子
寒の内マリオネットの糸もつる　節代

若狭水明会（若狭）

八十路坂越えて初湯の柔らかき　初花
柴燃やす音に温もる初湯哉　和風
伊勢海老のやや小さめや祝膳　白鷺
初湯でもおばんは今年も仕舞風呂　冬至
伊勢海老の鎧に似たる威厳かな　保人
つねよりもゆつたり浸る初湯かな　鼓
初風呂の命のびたる心地かな　郁子
伊勢海老や神々は皆酒が好き　寛久
からつぽのあたま沈める初湯かな　ことは
幼子の溢るるおもちや初湯殿　祥子
初風呂と言へどためらふ日の高さ　想子

桜林句会（大宮）

七度目の干支の丑鳴く初寝覚　光代
年迎ふ重ねかさねて卒寿かな　知子
臘梅の山懐に香の満つる　光子
岩に立つ松は男の艶すがた　美佐尾

櫻蔭句会（浦和）

若菜生ふ野溝に細き水の筋　由紀子
空気割れシャーペン折れる寒の入　茂子
寒の入風の忍者の住む我が家　公子
からからと風の音する寒の入　真理
明日入院の夫に早目の若菜膳　多美子
寒の入高架橋行く初電車　千恵
ことことと若菜の香り朝の粥　美智枝
水痛く言葉少なく寒の入　幸代

芙蓉句会（浦和）

送迎バスマスク笑顔に初日差す　正子
大安に片目入魂福達磨　道子
出走待つ荒ぶる馬の息白し　税子
咲き乱るマスクの花や明の春　仁
待ち望む恙無き日々年新た　美子

俳句の手ほどき（岩槻）

裸婦像はコンテの素描暖炉燃ゆ　延昭
川原に健気な小花淑気満つ　倭子
明け初むる淑気を鳩と分かちけり　佐江
松過ぎの素うどん誰も来ぬひと日　ます美
苔深き盆景の庭淑気満つ　水尾
玉砂利の音のかそけし淑気満つ　義子
靖国の森は淑気に招魂社　美佐尾
江の島や相模湾越し富士淑気　徹平
天心を仰ぎ淑気を身のうちに　慶子
その話素面じや聞けぬ福笑　忠男
寒牡丹素顔を隠す大女優　翔太
素甘食ひテレビで過ごすお正月　美子
早々に鋤き起こされし田に淑気　幸代
天明の手水は痛し淑気かな　卓郎
大楷のはたと崩るる淑気かな　かつ子

あゆみの会（浦和）

冬晴や足の向くまま銀ブラす　圭子
冬うらら荷物両手に立ち話　和
電飾の駅前抜けて冬銀河　朋子
冬麗やホームに富士が近くなる　山遊
冬の晴部屋いつぱいに朝日影　重子
冬晴や通勤女子の足軽し　藻好

神戸大池句会（神戸）

友よりの転居の知らせ年暮るる　玲子
垣越しに朝の挨拶息白く　礼子
鏡餅の第二ステージ水舞台　千津子
竹尺の三十センチ買初に　早苗

ミモザの会（横浜）

目と眉に主張をゆるすマスクかな　亜弥子
ぽつねんとただひとり座す小正月　栄子
重箱を戸棚の奥に小正月　慶子
小正月土人形の赤き頬　玲子
小正月笑ひの絶えぬ母の部屋　史代
動かずに道路の真中初鴉　由美子
女正月来し方語る老姉妹　知子
ピザハット・ドミノ・ピザーラ女正月　萬蝶
自画像をほつそりと描く小正月　千春

水明熊谷句会（熊谷）

ジグザグと気温のグラフ春近し　和子
炭の尉そつとそのまま春隣　秀子
朱の一輪添ひし仏間や寒椿　燈女
寒椿吾が人生に紅ほしや　治江
差し延べし指先白し冬椿　栄子
寒村は過客歓迎寒椿　徹平
春近し高校球児の声高し　正行
朝かげに大きく厚き寒椿　茂子

水明小川句会（小川）

老いたれば殊更春を待つ心　千代子
東西に雲の一列年新た　むら子
水仙の枯れゆくまでも香を放つ　綾子
日もすがら母のはなさぬ冬帽子　みや
冬枯れや峡の田小さく息をして　和子
初茜里山々を満たしけり　武
赤べこの頷いてゐる初明り　栄子

雛の会（浦和）

身の程の幸せで良し福寿草　佐江
一句より始まる一行初日記　燈女
どの家も庭の芯なり福寿草　むら子
夫もまた下町育ち福寿草　喜恵
日の丸のやうな赤子の初笑　チアキ
衣擦れのさばき軽やか初句会　輝翠

野ばらの会（浦和）

冬座敷手斧目残る黒き梁　秀子
枯蔦や聖堂のある幼稚園　栄子
枯蔦の一木抱く生きざまよ　治江
くねりくねりと大樹に絡み蔦枯るる　茂子
はく製と一瞬目が合ふ冬座敷　夏江
陽が命枯蔦生くる形あらは　和子
蔦枯るや犬くしやみして駆け出せり　みき子

芽吹句会（浦和）

賀状に座す達磨の気迫赤極む　千重子
紋服の歌舞伎役者に淑気かな　チアキ
晴れやかに鶴の舞ふ帯春小袖　玲子
ひらがなの賀状おもてはママの文字　富子
水明の飛躍の年ぞ今朝の春　修
赤紐で括りし丑の年賀状　ひろこ
鉄瓶の奏づるリズム年新た　道を

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

今更に進路に迷ひ初寝覚　延昭
冬椿落ちて一円花浄土　倶子
耳当てて幹の鼓動を冬木立　俊晴
寒林の古刹に残る葵紋　美枝子
貧乏神のでんと居座る年の暮れ　正信
生涯をこの地で過ごし冬木立　千恵子
白壁に影を映して冬木立　淑子
冬椿ここは紀文の屋敷跡　昇

円卓の会（浦和）

漬物の樽の重さや冬深し　輝翠
残照の沼に影置く浮寝鳥　静香
老杉の鴉の叫び冬深し　翔太
若水や闇の中より明烏　通を
冬深しひたひたと来る浅きもの　月を
蹲ひにひとつたゆたふ竜の玉　鶴城

りそな俳句会（浦和）

焼き鳥を返す親父の太き指　道を
厚着して朝市仕切る紅一点　寛治
焼き鳥の煙でぐいと一杯目　雅夫
焼き鳥屋常連さんの深き皺　建治郎
厚着して体型隠れ胸踊る　京子
ワゴンセール厚着の壁に阻まれて　久美子
重ね着や始発電車は高尾行き　暦文
焼き鳥の串数競ふ飲み仲間　マスミ

青葉の会（浦和）

大寒や汲み置き水が氷点下　和子
藁帽子並ぶ神社の寒牡丹　美子
二万歩のごほうび華麗冬牡丹　美智枝
冬木立懐深き鳥かごに　真理
大寒や野沢菜桶の水が咬む　公子
六つ咲き藁はみ出づる寒牡丹　美紗子
大寒の僧の荒行水の音　啓子
散りぎはをひらり朱一片寒牡丹　洋子
大寒の飛行機雲の鋒よ　輝翠

たかんな俳句会（川口）

かんざしのすまし顔かな初鏡　久美子
寒風に満月高く極まりぬ　福美
初鏡合せ鏡に襟黒子　律子
初鏡紅をさす手に陽の光　勢津子
凍滝の尊厳ここに極まるや　鈴木和子
凍滝を上る漢の命綱　義子
初鏡無毛の地とはさせまいぞ　鶴城
凍る滝水一滴を吊しをり　真知子
凍滝や飾るものなき男振り　水尾
もう一人の我を励ます初鏡　静香

きざきサークル（浦和）

狐火を語りし母は黄泉の国　俱子
狐火やはたと途絶えし風の音　啓子
雪女郎溶けし氷河の化身かと　喜代子
肘ついて浅い眠りに雪女郎　和枝
足跡は朝には消えて雪女　かつ子
自動ドア開けたままなり雪女郎　和子

皐月の会（浦和）

神籤引く袂のゆれや松の内　静香
風花や湯の香残して伊香保坂　孝麿
大僧正を迎ふる僧侶初太鼓　久子
海老蔵のあの目力を初芝居　暦文
繋がらぬ襷もあるや松の内　きいち

りんどう俳句会（浦和）

杣人の集落照らす冬桜　翔太
友逝きて走る山河や寒の星　君夫
セロの音に今宵浸らむ冬銀河　サヨ子
玄関前清めの塩や寒昴　典子
冬桜昭和の彩を零しけり　寛治
殺処分鶏百十四万羽星冴ゆる　徹雄
ビルの間にオリオン現れし今日も又　利子
平家琵琶弾き語る刀自冬ざくら　治子
冬星や惑ふこころの助け船　弘夫
オリオンやサソリ居ぬ間の冬星座　卓郎
声明の高まる伽藍冬銀河　紀子
冬桜峡の鬼石は石の町　正信
邂逅や身に降るごとき冬の星　順子

花衣の会（浦和）

米寿超す刀自の写メール冬ぬくし　みよ
ピロシキを言葉少なに女正月　京子
初夢や添ひ寝の犬の寝息もれ　みち
初富士に我を忘れてじつと立つ　峯雄
大服や妻に供へてさし向ひ　治
雪降るや駅のベンチに小座布団　章嘉

鶴川山百合句会（町田）

万歩計冬至の街を早足で　廉三
冬至風呂自在に生きしともいへず　雄二郎
冬至るとは冬の日の具さなり　月を
太陽の衰へ共に冬至粥　喜久
母と娘の乳房ゆらゆら冬至の湯　史代
金婚も過ぎて至福の冬至風呂　広子
義母より伝授冬至の日のいとこ煮　知子
冬至柚子一つ投げ入れ自慢顔　由美子
存へて軋む体を冬至風呂　千春
廃校の廊下が伸びて行く冬至　萬蝶
縄跳びのかけ声弾む路地の奥　理恵
畦道をゆく長き影冬至の日　玲子

櫟の会（浦和）

初富士を両手広げて抱きしめる　克之
命がけで尽くす看護師野水仙　朋子
到来の水仙束ねて活けてをり　富子
滄浪を浜辺にまねく野水仙　彰二
初御空力の襷ゴールへと　千重子
羽子板をこれ何と問ふ曾孫かな　裕之
楷書めく神技に喝采梯子乗り　治子

和歌山水明句会（和歌山）

足跡がはしやいでゐたり初雪に　和子
天井の染みは妖怪風邪籠り　道子
農小屋の扉全開初仕事　千枝子
立ちし鷺我関せずと鴨泳ぐ　千世子
インコ等に占領さるる冬座敷　満耶子
夜の雪誰か来たかと目覚めけり　きわゑ
はんなりと余生生きたし初鏡　洋子
寒禽の餌に牛脂を奢りけり　廸代

光が丘俳句教室（東京）

旧友のお国なまりの初電話　はる
生かされてゐるまま生きて七日粥　康子
初旅の中止の知らせ手帳閉づ　史子
叫べども大雪に村消え失せる　竜也
丁寧に珈琲豆を挽く三日　理恵

山茶花（浦和）

ぽつくりの鈴ちりちりん春着の子　マスミ
初夢を猫に邪魔さる朝まだき　泰子
春着きて紅つけはしやぐ幼き子　しず子
初夢は空飛ぶマントで地球見し　光子
初夢や第九を歌ふ吾がゐる　清一
コロナ禍で春着の人のごくまれに　美江子
初夢も千々に乱れて定まらず　綾子

新樹の会（浦和）

冬草や錆て置きざり三輪車　清吉
冬深し番所の屋根の鬼瓦　京子
散策路色さまざまの冬の草　修
冬草に新たな気配かくれんぼう　道を
初夢やまさに野望の月旅行　でん治
破魔矢手に走る袴や子は宝　平通
初明り雪の白さの優るやも　韶子
冬草や連れの歩幅の朝散歩　鶴城

☆　☆

水明大阪俳句会（守口）

円相を肚で一筆福寿草　ゆら女
やり残せし行事の数多古暦　洋子
寒の夜や波を慰む月灯り　智恵子
花嫁の呵呵大笑の年賀くる　人美
冬すみれピカソの彩を零しけり　敦子

蝌蚪の会（浦和）

赤べこの頭を押して春を待つ　元美
早梅や一歩づつ行く女坂　ひさの
待春や新築物件入居乞ふ　宣子
ぼんやりとすることもなく春を待つ　るみ子
待春や辻の地蔵の赤帽子　朝香
早梅や赤城颪を割りて立つ　礼子
早梅や園児見守る地蔵様　さち子
梅早し紅より告げる花暦　信
融け出しの微かな音に春を待つ　鶴城
待春を刑事ドラマの再放送　月を

❖原稿募集

季音（雪・月・花）五句
水明集　五句（巻末添付用紙）
鼓笛集　三句
（編集部より依頼のあった方）
※二百字詰原稿用紙使用。右上欄外に、季音（雪・月・花）・鼓笛集と朱書き。

水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切　毎月二十五日必着

原稿宛先　水明俳句会　編集部
〒330―0064　さいたま市浦和区岸町
四―一〇―二二

水明全国大会　兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼　題　「春の夜」（はるのよる）　春夜・夜半の春・春の宵・春宵・宵の春

「野遊」（のあそび）　山遊・野がけ・春遊・ピクニック

※「春の夜」「野遊」は右の季語で詠む事

「話」詠込み

※「話」は春の季語を入れて詠む事

例句　土筆の袴とりつつ話すほどのこと　大橋敦子

桃咲くと鉄線の棘へだて話す　岡本　眸

句　数　通じて二句（一組）

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料　一組につき千円

締　切　五月十日（発行所必着）

※投句用紙（水明三月号・四月号に添付）使用のこと。コピーも可。

水明全国大会のご案内

［と　き］　2021 年 6 月 28 日（月曜日）
［ところ］　ロイヤルパインズホテル浦和
〒 330-0062　さいたま市浦和区仲町２－５－１
TEL 048 － 827 － 1180
［行　事］　水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞の授賞
新誌友紹介者の表彰。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と授賞、講評等。

親睦会、参加費、宿泊斡旋、申し込み、締切などは４、５、６月号に添付の指定用紙を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。（申し込みは５月１日～６月 15 日にお願い致します。）

水明俳句会　事業部

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰　山本鬼之介

［指導者］　網 野 月 を
［作　品］　７句［受講料］1,000 円
［方　法］　①用紙自由　②住所・氏名・電話番号を明記
③ 84 円切手を同封
④返信用封筒は 不要　⑤締切なしで随時受付
［送付先］　網 野 月 を
〒336-0025　さいたま市南区文蔵１-13-3-401
電話 048－862－5926

春の吟行会のご案内

日　　時　令和３年３月 29 日（月）

会　　場　本所地域プラザBIG SHIP　東京都墨田区本所１丁目13番４号
　　電話　03－6658－4601　FAX　03－6658－4613

受付開始　10 時

句会開始　13 時

投　　句　嘱目（当季）２句　締切　12 時

会　　費　2,000 円（お弁当・お茶を含む）
　　※コロナの時節柄懇親会は行いません。

申　　込　３月10日までに会費を添えて発行所総務部までお申込下さい。

吟行場所　○隅田川　○両国周辺　○安田庭園（無料）　○横網町公園（東京都慰霊堂）　○下町散策
　　春の隅田川の風情、そこに架かる名橋の趣き、各吟行地の桜をお楽しみ下さい。
　　尚、地図は受付の際お渡し致します。

アクセス　○ＪＲ御徒町北口下車→東京都バス（錦糸町行き）
　　本所１丁目下車→バス停より１分で会場
　　○都営浅草線・大江戸線「蔵前」駅より徒歩８分。
　　○東京メトロ「浅草」駅より 12 分
　　☆大勢の方のご参加をお待ちしております。

主担当「第２例会」　支援「事業部」

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和三年一月三十一日現在―

匿名	6口	湯浅和	3口
綿貫ひさの	3口	野口和子	3口
武田重子	6口	和田二八郎	10口

―合計31口

水明発展基金募集のお願い

○一口千円　何口でも何回でも何時でも。
○振込口座番号　00130-5-45024
○領収証は発行せず、その都度「水明」誌上に掲載してお礼に代えます。

水明俳句会・水明発展基金

誤植訂正

三月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

八三頁「水明発展基金」
誤　山本鬼恵子　2口
正　削除

角川『俳句』別冊（カドカワムック）
12月7日発売予定
俳句年鑑 2021年版
2019.10 ▸ 2020.9
予価3000円（税込み）

口絵◉ 二〇二〇年 一〇〇句選……岸本尚毅 選
写真でたどる 二〇二〇年の俳壇

【巻頭提言】……井上弘美

年代別 二〇二〇年の収穫

諸家自選五句……約六〇〇名！

今年の句集ベスト15
今年の評論ベスト7
四協会の一年
各俳句賞のひとびと ほか

【合評鼎談 ―総集編―】
山尾玉藻・三村純也・山口昭男
今年の秀句を振り返る
〈令和俳壇「心に残る秀句」発表！〉

◉全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き！

◉全国俳人住所録 約二三〇〇名を一挙掲載！

KADOKAWA
発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
● お問い合わせ先（注文）TEL.0570-002-008（KADOKAWA購入窓口）

風　声

○**現代俳句**一月号――「現代俳句の風」欄

襖閉める静かに静かにの一語です　岡野順子
夜々の道付いて回り来寒の月　河原叔子
スケート場未来の選手息深く　梅澤輝翠
ナポレオン空つぽにして頬被　近藤徹平
断捨離は一日仕事暮早し　永野史代
狼煙めく峡の棚田の焚火かな　町野広子
身の中を抉る月光凍返る　宮﨑チアキ
見送りの母に一礼寒稽古　由良ゆら女

○**現代俳句**一月号――「現代俳句の風・秀句を探る」欄

田所魅沙絵氏に感銘十句抄に　町野広子
狼煙めく峡の棚田の焚火かな

○**くぢら**（中尾公彦主宰）一月号――「受贈俳誌美術館」欄

実千両これぞ旧家の門構へ　**鬼之介**

○**駒草**（西山睦主宰）一月号――**「句誌巡り」欄**

年頃のかな女の写真秋の昼　**鬼之介**

「水明」は長谷川かな女を創始者として昭和5年9月1日に創刊され、昨年11月に90周年記念大会が行われました。山本主宰をはじめとして、編集部、誌友の方々の努力に敬服いたします。心よりお慶び申し上げます。

掲出句、写真はいつの頃の物なのかは明らかにされていませんが、長谷川零余子と結婚した頃か、または婦人俳句会の幹事を務められた頃か、輝く未来と希望を抱いていたことと思います。

水明創刊90周年記念特別作品正賞の井口俊晴氏の句から一句。

炎天に動く影なき田面かな　井口俊晴

○**新月**（松田碧霞主宰）一月号――「受贈俳誌紹介」欄

袖濡らす夜露も粋に女坂　**鬼之介**

○**雪嶺**（石本雪鬼主宰）一・二・三月号――「受贈誌」欄

戒名を付けてやりたき秋の蝉　**鬼之介**

○**玉梓**（名村早智子主宰）一・二月号――「他誌拝見」欄

白無垢の花嫁に添ふ秋の風　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）一月号――「諸家近詠」欄

大津絵の鬼みな愉快夜半の秋　**鬼之介**

○**山彦**（河村正浩主宰）一月号――「諸家近詠」欄

落ちさうで落ちぬ離宮の桐一葉　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）一月号――「受贈誌の一句」欄

秋夕焼生徒二人の連絡船　野田静香

（日高道を抄出）

俳壇

3月号
2月14日発売
定価900円（税込）

特集 俳人たちの3・11
―東日本大震災から十年
追悼企画 追悼・有馬朗人

巻頭作品10句
石田郷子・井上論天・加古宗也
加藤耕子・佐藤郁良・中原道夫
西山　睦・本井　英

巻頭エッセイ
仁平　勝

八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅱ期〕……山本一歩・田口紅子

新連載
ものがたりのある俳句……堀本裕樹
いきもの歳時記……角谷昌子
俳句史を見直す……秋尾　敏

連載
続々・日本の樹木十二選……広渡敬雄
俳壇史エピソード……坂口昌弘
思想としての虚子……中村雅樹

俳句と随想12か月　菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

月刊俳句界

毎月25日発売
定価1000円(税込)

2021年3月号

特集 いま、評論を読みたい！
○寺山修司はなぜ俳句をやめたのか　五十嵐秀彦／○今こそ笑いを～江戸俳諧にみる「笑い」　復本一郎／○沢田はぎ女～幻の「ホトトギス」女性初巻頭作家　坂本宮尾／○「無季」句が名句となり得る条件とは　大井恒行／○高柳重信～多行俳句の読み方　外山一機／○渡邊白泉、その魅力の秘密　今泉康弘

特別作品30句　稲畑廣太郎
〈グラビア〉俳句界NOW　松尾隆信

耽美性俳句とは何か
●俳句における耽美性　関悦史
●一句鑑賞　中原道夫　小島健　高田正子　山田真砂年　田中亜美　高勢祥子

発表！　第22回山本健吉評論賞

※セレクション結社　「海坂」久留米脩二

私の一冊　小瀬千恵子「天華」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
亀石倫子（弁護士）

別冊　投稿俳句界
一流選者14名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

後記

長い冬が終り、例年ですと心が浮き立つ季節ですが、今年はコロナによって、春はまだという感じです。

特に北陸地方、若狭の方々は、コロナに加えて、例年にない大雪、本当にお疲れ様でした。

「水明」四月号から始まる新企画「山紫集」に先立ち、今月号から「水明誌を繙く」を掲載します。

この頁は、他の結社の方に「水明」誌の会員の句の中から選んで批評して頂くという新連載です。水明会員の勉強に役立つならばという主宰の英断と、網野月を氏のご努力によって生まれました。第一回に選ばれたお二方、おめでとうございます。

さて、今年の全国大会は、例年通り六月開催予定です。昨年の全国大会も例年通り六月の予定でしたが、コロナウイルスによってやっと十一月に実施しました。今年こそ、ワクチンに期待して順調に六月に開催出来るよう願っています。

今月号の六五頁、六四頁の全国大会と兼題句募集をお見逃しなく。そして、今月号の巻末には、投句関係の応募用紙が沢山ついています。まず「水明集」次に「山紫集」その次に「全国大会投句用紙」二枚「水明通信」と盛り沢山です。それぞれの用紙を使ってご応募下さい。尚、大会句の応募用紙は四月号にも二枚付きますが、足りない、書き損じた場合等のために、あらかじめコピーをお願いします。

今年のお花見はどうなるのでしょう。外出もままならない日々、なかなか俳句が出来ません。

皆様はいかがですか。（節代）

今月のはてな？

亜剌比亜（アラビア）
蟬氷（せみごほり）
肚（はら）
鸛（こふのとり）
皀角子（さいかち）
亜阻（つはり・をそ）
堆朱（ついしゅ）
弄る（いじく）る
濃霜（こしも）

55 44 33 31 29 19 14 6 1 頁

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）

時間：午後１時～午後５時

（火・木・土・日・祭日は休み）

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和三年三月号
通巻一〇八六号
令和三年三月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七－一八
電話 048－886－六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四－一〇－二
電話 048－822－四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇－〇－一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

六月号　三月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集　六月号　三月二十五日締切

二月の兼題「辛夷」

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明全国大会投句用紙

☆投句締切　五月十日（必着厳守）

句　数　通じて二句（一組）　・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
・組数は制限しない。
出句料　一組につき　一、〇〇〇円（同封）
用　紙　足りないときは、コピーも可。

きりとりせん

兼題

「春の夜」（はるのよる）
「野遊」（のあそび）
「話」詠込み
※六四頁参照の事

都市又は府県名	姓並びに俳名

きりとりせん

兼題

「春の夜」（はるのよる）
「野遊」（のあそび）
「話」詠込み
※六四頁参照の事

都市又は府県名	姓並びに俳名

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

稜線の彼方の富士を初景色　鈴木康世
海峡に鳶の輪二つ寒入日　田寺玲子
わたくしの真うしろにゐる雪女郎　永野史代
二日はや嘴太鴉に喝くらふ　西山貴美子
飛び石を渡れば楚々と水仙花　波多野寿子
四日はやバター香りぬ白卓布　星野和葉
日陰ればおのが光の冬桜　大場順子
冬薔薇魔女の繰る糸車　内田恵子
初夢の短編走る走る私　藤澤喜久
どんぶりに二度たたき割る寒卵　原田想子
床の間は日輪の軸事始め　宇田白鷺
瑞鳥の飛び来る郷や初御空　松宮保人
母子手帳受け取る朝の寒卵　正木萬蝶
若冲の鶏鳴を聞く初枕　井上玲子
大寒が正座してゐる奥座敷　松井由紀子
耳当てて幹の鼓動を冬木立　井口俊晴
「カノン」鳴る家族無料の初電話　下川光子
分校や今朝は師弟が雪達磨　近藤徹平

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道＜身辺トピック＞

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明＜随筆＞

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

櫂なくも船漕ぐ夫の日向ぼこ　原田秀子
マジックの瞬間移動神の旅　反町修
カーテンを駆くる鳥影冬うらら　曲淵徹雄
冬近し尖り来る浪切るみよし　保坂翔太
火事跡に半身焼かれし御神木　村杉清吉
風呂吹の真白き肌に堆朱箸　梅澤輝翠
白菜を包む去年の新聞紙　塩野久子
神の留守近江の杜の水時計　日高道を
西方に隙間ぽつかり冬の雲　青木鶴城
炬燵列車お国訛の賑やかに　野田静香
読み聞かす続きは夢で日向ぼこ　越田栄子
古机磨き一輪冬の薔薇　染谷正信
転職の覚悟を固む虎落笛　横山君夫
クリスマスカードサンタのディスタンス　丸屋詠子
唇にポインセチアの色をのす　山﨑郁子
冬菜抜くGのマークの野球帽　渋谷きいち
思ひ出ぎつしり解れたるセーター　加藤でん治
寄鍋のお奉行様の国訛　新暦文

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	石田慶子 正木萬蝶
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗

水明　令和三年三月一日発行　毎月一日発行
（第九十四巻　第三号）　定価　一〇〇〇円